國民教養講座案內

本月の講座は左記の通り我等日本國民として思想上是非共知悉せざる可らざる最も適切肝要なる科目と斯界の權威たる両講師の御出講に付希くは萬障を排して御來聽あらんことを

一日時　六月八日及二十二日　自後一時半　至四時

一會場　統一閣　淺草區北清島町十四　電車通

一科目講師

一聖德太子と三教鼎立　前東洋大學々長　境野黃洋氏（八日）

一建國史の大要　神宮奉齋會々長　今泉定介氏（廿二日）

一聽講料　一科金貳拾錢

但教員、軍人、警察官は無料

昭和五年六月　知法思國會本部

統一定價		
一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共金壹圓之事
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

統一廣告料		
表紙一頁	金貳拾圓	前金
一頁	金拾五圓	
半頁	金九圓	之事
四分一頁	金五圓	

昭和五年三月廿四日印刷納本
昭和五年六月一日發行（第四百二十三號）

神奈川縣横濱市磯子區磯子町廣地一四八
編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
印刷所　都印刷所
電話高輪六〇二四番

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番

不許複製

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

宗教の本質より見たる佛教（上卷）……本多日生

記事……

○知法思國會街頭布教誌（完了）

○開堂供養

○各地教報

○誌料領收

第三十五年七月號

宗教の本質より見たる佛教（上卷）

大僧正　本多日生

目次

一、緒言
二、宗教の本質
イ、人間の本体と人生の實相
ロ、超人的偉格者の實在
ハ、兩者の感應
ニ、精神生活の法悦
ホ、道義的感情
ヘ、人類文化の一大要素

一、緒言

これより『宗教の本質より見たる佛教』と題して、宗教はどういふ事がその本質であるか、理想的に宗教の完全な意味合を考へて、さういふ註文をしたその上から佛教を觀察して見たいと思ふのであります。吾々は佛教を尊信して居るから、自然その方へ引つけたやうな宗教の本質觀が現はれて來るかも知れませんけれども、併し自分としては宗教學の方面からも、その他今日の思想研究の上からも考へて、斯ういふ風なのが本當の宗教である、整うたる宗教であるといふことを常に腦裡に描いて佛教を觀て居るのであつて、佛教なるが故に一から十まで唯無條件でそれに屈從して居る、判つても判らぬでも何でも關はぬ、唯佛教を有難がつて居るといふやうな譯ではないのであります。今日の人文の上から考へて、どういふ風なのが良き宗教である、整うたる宗教である、宗教といふものは斯くあるべきものだと

いふ一つの原則を一方に考へて、その原則と照し合せて佛教を研究しつゝ進んだので、自分は學生時代から常にさういふ風な頭腦に支配されて居るのであります。即ち學問をする最初からさういふ觀念を自分は有つて居つた。私の事へた師匠は、熱烈な信仰的また宗學的の人でありましたけれども、他面に時代の知識にも注意して、早くより哲學とか論理學とかいふ風な時代の學問にも研究を進めて居りました、唯だ古來の言ひ傳へであるから尊いとか、或はお經に書いてあるから無條件で信奉するとかいふやうな頭腦は少かつたので、有難いといふ信念は有つて居るけれども、それは皆な相當なる條理を以て信仰して行くので、唯だ習慣的にお有難風に來たのではないのであります。併しだん〳〵研究を積んで見れば、佛教といふものは實に完全な、卓越したものだといふことに、その研鑽の結果が到達致しましたから、それに對して信念を捧げて居るのであります。偽らざる自分の理解と信念の上には、全然一致を有つて居るのでありまして、『研究の上ではさうは考へないけれども、先づさういふ事を言つては信仰を壞るから言はずに置かう』といふやうな、偽つた考へ、表面を糊塗ふといふやうな考は自分は有たないのであります。世間の宗教家の中には無條件で唯ボンヤリと信じて居るやうな人も多いでありませうし、理由も判らんでやつて居る人もあり、信じたやうな顔をして實は信じて居らぬやうな者も澤山あると思ひますけれども、私はさういふ風な事は嫌ひである。自分が信ぜられないのならば、今日にでもそんな事は廢めてしまつて、モット氣の利いた事をやつたら宜からうと思ふ。併し自分は正直なる觀念の上に、宗教は大事なものであり、佛教は立派なものであり、これが爲に力を致すのは善いことだ。價値ある事だといふことを認め得て、今日も尙ほ微力を捧げて居る次第である、少しもそこに自己を偽つた

る意味合は無いのであります。或る人は、日蓮研究會とか、法華經研究會とかいふことを言つても『研究とは失敬だ、お前等の智慧で日蓮聖人のやうな偉い人が研究が出來るものか』などと言つて腹を立てたり、チョット『日蓮は』といい風に呼捨にしても『勿體ない〳〵』と言つてビク〳〵するやうな人があります。けれども、さういふ風な唯だお有難主義では自分は養はれて居ないのであります。併しさういふ事を言うて居る人が非常な信念のある立派な人かといふと、さういふものではない。無論宗教には信仰といふ所謂感情的な情操が大切であるけれども、併し他面には理智の理解がなければ、情操のみでは危いものである、情といふものは時に依つてグラつくもので、即ち菊石も笑靨に見えるといふのが情であります、『非常な別嬪だから』といつて人に紹介した女が菊石づらであつたといふのでは、見た人が感心しない譯であるから、情操が宗教に大事だからといつて、單純にさういふ事だけで今日の時代に宗教の傳道に從事することは危いことであります。さういふ暗愚な事は學生の時分から自分は大嫌ひでありました。

隨つて今日お話するところの宗教の本質といふことも、執はれざる精神に依つて、今日の人文上に現はれて居る宗教は斯うあるべきものだといふ、模範的なる、理想的なる原則を一つ定めて、それから觀て佛教が果してその原則に對してどういふものであるかといふ事を觀察したいと考へる。身をしばらく局外に置いて、佛教に對して多少は批判的の態度に於てこれを觀たいと思ふのであります。

二、宗教の本質

その場合に私が宗教の本質として考へて居る事柄は、約言すると次のやうなことになるのであります。

宗教の本質とは

（イ）人間の本體と人生の實相とを明かにし

（ロ）宇宙には超人的靈格者の實在を信じ

（ハ）その兩者の感應に依り

（ニ）精神的生活の法悦を得、そこに

（ホ）道義的感情を養うて過を改め善を行はしめ

（ヘ）此の教化を以て人類文化の一大要素を成す

ものなり。

即ちこの中に六つほどの事柄を含んで居る、その一つを缺いても完全なる宗教とは言へない。又これ等の事柄に就て多少の意見を吐いても、それが整うて居らなければやはり不完全なものである、この大事な事柄を十分に說き切つてそこで初めて良き宗教といふことが言はれるのである。一般の人がやつて居るやうに、『隣町のお稻荷さんが御利益があるだらうか』『イヤ役方の觀音樣の方が效くさうだ』……さういふやうな事で宗教が選ばれるものではない。どころが現代は、愚かな人が佛教の觀方を知らないばかりではない、殆んど日本人の大部分は宗教といふものを知らないのである。知らないからその良否が判らない、例へば女の締める帶なら帶を知らない者には、帶の良否が判る筈がない、平生印半纏ばかり着て居つて、女の丸帶などといふものを見たこともない漁村の親爺が、女の丸帶を買つて來て呉れと頼まれて三越へやつて來たとする、あつちを引つ張り、こつちを引つ張りしても、どんなのが丸帶だといふ事を知らない、『何でも幅が廣い物だといふから、これが廣くて廉くて宜からう』といふので、腰卷のやうなものを買つて歸つて『どうだ、良い丸帶だらう、幅の廣い割合には廉いぞ』と言ふのと同じやうな譯で、日本人の宗教論といふものは、それよりもモット暗愚な事を互に語り合うて居るやうに思ふ。古來のよほど立派な學者がさうである、先づ神道の方で言へば平田篤胤といふやうな人は、神道學者として

國民多數の精神を支配した學者であるけれども、それが佛教を眺めて、『佛教はつまらぬものだ』、法華經を見て、『法華經ナンといふものは反古紙みたいなものだ』といふことを盛んに書いて居るが、それは宗教といふものを知らぬのである。何故あんな事を言ひ居るかと思つて、平田篤胤の頭腦を解剖して見ると、彼は宗教といふものは魔法使ひみたいなもので、その魔法のうまく當るのが良い宗教だと考へて居つたやうに思はれる、何でも譯の判らぬ事をパッとやつて、そこから蟒蛇でも飛び出すといふやうな事をやれば、それが非常なエライ宗教だと考へて、さういふものを探して居るから、法華經をいくら讀んでも蟒蛇も飛び出さず虎も飛び出さない、たゞ紙に四角な字が書いてあるきりである、そこで『これは藥の効能書の紙のよつたやうなものだ』と言つて惡口を言つたものである。さういふ思想を承繼いで『さうだ〳〵、法華經といつても賣藥の包み紙のやうなものだ』といふ事だけを敎はつて、それが學者だとか大臣だとかいふものになつて、『法華經ナンといふものはナーニ君、あれは紙のよつた反古紙だよ』といふやうな事を嘯つて居るのが、日本文明の現狀である。

況んや熊公、八公といふやうな輩が宗教に就て語つて居る、所謂床屋學問、風呂屋學問といふやうなものは、何を言うて居るか判らぬ。實に宗教に關しては日本人は極めて無智蒙昧な國民であると謂つて宜い。佛教のやうな立派な宗教を有つて居る國民だから、宗教的には世界に冠絕して居るかといふと、決してさうではない。唯だ不思議に佛教の教が傳つて、善い坊さんが出て居つたから立派な教化を遺したけれども、今のそれを信ずる者に就て見たならば到底お話にならぬ、例へば天台宗としては傳教大師の如き偉い方が出られたけれども、今日の天台宗の檀家信者を集めて、さうして傳教大師の頭腦とあの

不忍の辨天樣にお參りしたり、淺草の觀音樣にお參りして居る者の頭腦と比べたならば、似ても似つかぬものになつて、全然違つてしまつて居る。法華宗としては日蓮聖人と、今日のドンドコ法華、お會式などに飛び出して石油鑵を叩いてナンミョウ〳〵コリャ〳〵とやつて居る輩と比べて見たならば、これが其の教化の流れを酌むものかと疑はなければならぬやうな、似ても似つかぬものである。日蓮聖人が法華の開祖だといふならば、何處かに似た所があるだらうと思はれるけれども、似た所どころではない、二重にも三重にも間違つてしまつて何處にも似た所はありはせぬ、これは實に恐ろしい事である。一つの事を間違へぬやうにといつて、よほど嚴重な意味で話をしても、三人、五人、七人と傳はれば間違ふものである。飜譯などをすれば、初めの原文から五箇國、六箇國の言葉にだん〳〵飜譯をして行くと、終ひには全然意味の變つたことになるといふ事を聞いて居る、それは飜譯者が間違へぬやうにと思つて、その言語に通じた者が一生懸命やつても違ふ位のものである。近頃新聞に出て居つた事でチョット面白いと思つたのは、二十人位の人間がグルッと坐つて、小さい聲で順々に隣の人に耳打をする、『四月になつたらお花見に行きませうか』『お團子を食べませうか』といふやうな事を、その通りに次から次へ傳へて行く、さうするとそれが途中で少しづゝ間違つて來て、二十人目の最初言うた人間の所に戻つて來る時分には、まるで變つた言葉になつてしまふ、『お在見に行かう』と言つたのが『風呂に行かう』といふやうな事になる、『團子を食べませう』と言つたのが『頭を歐りませうか』といふやうなことになる、さういふ遊戯があるといふことが書いてあつたが、それ位に間違へぬやうに言はうと思つても、チョイ〳〵と間違つて行くものである。隣家で縊死者があつたといふやうな事でも、それがどういふ譯で

首を吊つたといふ話の間違ひがだん〳〵擴がつて、イヤあの内儀さんはヒステリーだつた、イヤ亭主が非常に虐待したからだ、イヤさうぢやない、强盜に殺されたのだ……といふやうなことになつて、一つの縊死事件が幾つにでも傳へられて行くものである。その位のものであるから、宗教のやうな無形の精神上の心得に關する事が、無學な者の間を轉々して行くに就てはどの位間違つてしまふか判らない。

日本には佛教が弘まつて、高僧碩德が輩出したといふけれども、それは其の少數者の頭腦に限られて居るので、一般の民衆の宗教思想といふものは明かに非常な低級なものである。これは大いに改善もし、大いに發達も圖らんければ、到底健全なる文明には達し得ない。健全なる文明といふものは、どうしても道德とか宗教とかいふものゝ理解、信念が完備して居らなければならぬものである。如何に政治とか經濟とか軍備とかいふ方面に於て整うて居つても、道德、宗教に就て、道德の理想が低いとか、宗教の信念が薄づいて居るとかいふことであつては、健全なる文明は出來得ないものである。不幸にして我國に於ては、宗教の本質といふやうなことに就ての考へ方は殆んど判らないと言つても宜いのである。

そこで今私が茲に大体の意義といふか、宗教の本質に關する概念として擧げたこの事柄は、苟も宗教を語らんとするにはどうしても心得て置かなければならぬ事で、先つ今日の文明が許して居る公理、公則とも謂ふべきものである、何人もこれに反對し得べき事ではないと思ふ。併し斯ういふ考へ方で宗教を選んで行くといふ人は、今言ふ通り極めて乏しい、それだけ日本人が宗教的には無智蒙昧である、漸づべき國民であるといふことがわかるのである。歐米諸國に於ては、その宗教は基督教であるから、吾々から觀ては低い宗教であるけれども、宗教に對

する考へ方といふものはナカ〳〵進んで居る、宗教を大事だと思ふことも、宗教に就て心得違ひをしてはいけないと考へることも、又聖書といふものが家庭に入つて能く消化されて居ることも、すべて宗教に對する國民一般の考へ方、知識、信仰といふものは、よほど行屆いて居るやうに思はれる。ところが佛教に於てはサッパリさういふ事が整理されて居ないのである。

日蓮聖人はその佛教の紛亂誤解を整理するために奮闘せられた人であつたけれども、日本人はその日蓮聖人の忠告を用ひなかつたのである、さうしてその教を奉すると稱する者は、今言ふやうに雜亂ドンドコになつてしまつた、それを又さういふ風に導くやくざな坊さんが澤山居る譯である、今でもさういふ事を平氣な顏をして見て居る坊さんが多い、それはドンドコやつて居る者よりは多少は道理を知つて居るのだけれども、ドンドコ言はして置けば賽錢が上る、そんな事をしてはいかんと言へば賽錢箱が空つぽになるから、まア〳〵やらして置く方が宜い……と言つて平氣で居るのだから、それは寧ろドンドコやつて居る者よりは罪が重い。これを刑罰的に言へば、ドンドコやる者が三箇月で出られるならば、さういふ事を平氣でやらせる坊主は五年ぐらゐは喰はなければならぬ譯である。何と言つてもこれは非常な惡い事である。教といふものはどうしても之を正しくしなければならぬ、基督なども言つて居るが、宗教が腐るといふことは一番恐ろしい事である、日蓮聖人も『國は法に依つて昌え』とか『法を知り國を思ふ』と言はれて、法が腐つたならば國も腐るといふことになるのである。『鹽にして味を失へば施す所なし』と基督が言つたといふが、御馳走を拵へるといふにはどうしても鹽と醬油が大切である、それが腐つて居るとか、醬油の中に石油が一滴入つて居るといふことになつたならば、どんなに上手にお汁

を拵へても、蓋を取つて食べようとするとブーンと石油の臭がする、『こんなお汁は駄目だ、捨てゝしまへ』……又モウ一度拵へ直して持つて來る、やつぱりブーンと來る、『これも駄目だ』といふことになる。大根を煮ても豆腐を煮ても、その醬油を使わたらキッと石油の臭がブーンと來る、斯ういふことになれば主婦がいくら臺所で骨を折つても何の御馳走も出來るものではない。だから臺所で味噌が腐るとか、梅干が腐るとか、醬油が腐るとかいふ事があれば、昔からその家が亡びると言つて吃驚した位のものである。現代の國家は、その國家全體の文化に於ける醬油なり鹽なり梅干が腐つて居るやうなものである、だから吾々が躍起となつて心配して居るのだ。他の蒟蒻が腐つたり燒豆腐が腐つたといふならばそれは何でもない、そんな物は掃溜へ捨てゝ新しいのを使へば宜い、けれども何度作り直しても醬油が腐つて居る、味をつける鹽が味を失つて居るといふことになつては、救濟の方法が無い譯である。そこに人類の文化に於ては、道德や宗教の根本が、一切の必要を超越したる大事なものだといふことになるのである。そこに『國は法に依つて昌え』といふ言葉が出て來るのである。

此の事は唯だ吾々が言ふから價値なき言葉のやうに聞えるかも知れんけれども、古來の聖者哲人は皆その事を言うて居る。お釋迦樣でも孔子樣でも、聖德太子でも西洋の賢哲でも、何れの時代に於ても千百世を導く達人の言は、必ずやその點を喝破されて居るのである。それ以下の平々凡々なる輩はその事がわからぬから、唯だ目前の事柄に依つてのみ國家社會の興廢存亡を見んとして居るのである。それであるから是非とも我が國に於ては、この宗教の本質といふことを明かにして、さうしてそれから眺めたる佛教の教化を發揚して行きたいといふ希望を以て、この講演を申上げる次第であります。

（イ）人間の本體と人生の實相

そこで先づ宗教の本質といふことに就て、前に掲げた定義の順序に基いてこれを說明するならば、第一には人間の本體と人生の實相とを明かにするといふことである。宗教は何事よりも前に人間其ものゝ本體を明かにし、又この人間の世の中の眞實の相を見とほすやうにしなければならぬ。普通の人間は少々くらゐ學問をしても、人間の皮相しかわからぬのである、法律の方では博士であつても、文學の方では博士であつても、人間の本體といふやうなことは判らないのである。皮相の人間といふのは、五十年七十年にして死んで行く人間、これを宗教的に言へば小我というて居る、小さき我である、この遷滅無常を免れ得ないものが我だ、死んでしまへば前途はわからぬ、我といふものは五十年七十年生存して居る間の此の肉體を有つて居る人間だけだと、斯う思つて居る。ところがそれは沈着いて考へて見るといふと非常な不安なものである、浮ついて居る時にはそれがわからない、女の人が髮を結うて白粉をつけて、別嬪ぢや、美人ぢやと言つてバタ〳〵して居る間は氣が着かないけれども、沈着いて考へると人間といふものは生命の無常なものである、それが何時襲うて來るかわからぬ、生き永へたところで年老れば美しかつた顏も皺クチャになる、永いやうでも經つて見れば短い間である。『花の色はうつりにけりないたづらに、我が身よにふるながめせしまに』といふ歌のとほり、美しい花だナと思つても日暮には早やその花が散つてしまふといふことになる。沈着いて深く考へると、その間の時間が非常に短く感ぜられるのである、醉うて居るとそれが永いやうに思つて居る、『まだ二十歲だ、まだ二十五だ、皺の寄る迄にはまだ二十五年もある……』といふやうな氣で、ナカ〳〵人生は永いやうに思ふけれども、二十年や二十五年といふものは、無限といふ永遠の思想から

したならば一秒間も同じことである、人生といふものは過ぎ去つて見れば二十年三十年の經過は夢の如きものぢや。さういふ感じは人間が沈着いて考へると誰にも出て來る、それが出て來るところに宗教は生れて來るのである。人生に醉うて居る間には宗教は無い、醉うて居りながら唯だ『良い婿さんが欲しいから……商賣を繁昌さして貰ひたいから……』と言つて藝者などが參詣したりするのは、あれは決して宗教ではない、宗教に附隨して生へて居るところの徵だ。ちようど掃溜に蕈みたやうなものが生へるでせう、これはしめじか椎茸かと思つて煮て食つたら、腹が痛つて死んでしまふといふやうなものである、あれは決して食へる蕈ではない、掃溜のものが腐つて生へたところの徵である。それと同じやうに、『很處のお稻荷さんは御利益がある、何でも願をかければ肯いて下さる』といふので、『あの金持の息子が妾を身請して呉れますやうに……』ヂャラン〳〵……とやつて居る、そんなものは決して宗教ではない。それは彼等が客を騙さんとするに方つて、モット自分に客を騙す力を得たいといふやうなことからやるのであつて、さういふ時には神樣は即ち惡事の共犯人である。ところが世の中にはさういふ事がナカ〳〵澤山ある、嚴重に考へて行くと、今日廣く世間に行はれて居る迷信は決して宗教ではない、宗教に似たところの一種の徵である。さういふものを又宗教だと思つて、小學校あたりでは、『宗教は全部迷信ぢや、そんなものに迷はされてはいかん』といふ事を生徒に敎へて居る、これも亦あまりに甚だしい話である。隨分人間といふものは厄介な者ぢや。宗教は人間を最も善くするものである、然るに露西亞あたりでは『宗教は阿片ぢや』と言つて居る、一番結構な、不死の良藥であるべきものを、これを阿片ぢやと言ひ、徵ぢやといふやうな事を言つて排斥して居る。それは皆宗教を理想的に考へないで、

それに附隨したる迷信を以て直に宗教ちやと思ひ込んで起ることである、それはどつちにも罪がある。宗教は最も善く人を救ひ世を濟けるものであるが、又或る邪教は最も能く人を惱まし世を毒するものである、最も尊ぶべきものにして、また最も恐るべきものである、それが宗教の名に於て併存して居る。

そこでどうしても人間の皮相から考へては遷滅無常を免れない、儚ない人間である、小我であるといふことを考へて、それからその小我では安心が附かないから、どうして安心を得ようかといふ所に、一つの覺醒といつて夢が覺めて來る所がある。さうすると自分には大我といふものがある、自分の心を考へて見ると、この生命は始なく終なく續いて行くものである、生れる時分にこの魂が出來たものではない、親が拵へて呉れたのでもなく、神樣が呉れたのでもない、自分の魂は生れかはつて來たものであつて、人間の果報を以ての故に今は人間に來て居るのであるが、どこにかく自分の生命は始なく終なく續いて居るものである。隨つて死んでもこの魂、生命といふものは消えるものではない。それは直ぐわかる事ナンである、一切の眞理の根本を成して居るものは、無かつたものが生ずるとか、在るものが無くなるといふ事はないといふことである、これを能く考へて見たら宜い。無いものが生ずるとか、在るものが無くなるといふ事は、どんな神樣が出て來ようが、手品師が出て來ようが、それは出來ないことである。どんな上手な手品師でも、全然種なしで、素裸でコンクリートの壁の前で周圍に何にも置くことの出來ないやうにして置いて、そこに例へば天勝を伴れて來て『サア藝をやれ』と言つたならば、半巾の中から銅貨を一つ出す手品でも出來はしない、それは世界中の手品師でも出來ない。それが舞臺でやると公用にやるといふのは、何處かに種を隱して居る、指の間に隱して居るか、ポケットに入れて居るか、

何處かに隱して置いて、さうして半巾をバッ〳〵と動かして居る間に、チョット見物の氣の着かないやうに出して來るのである。だから天勝の奇術を見て半巾の中から五拾錢銀貨が出て來たら、その銀貨は本から何處かに在つたのを出して來たのだナといふことを考へなければならぬ。今度その銀貨を半巾に包んでバッ〳〵とやると無くなつてしまふ、それは五拾錢銀貨が半巾の内で消えたと思つたら間違ひで、袂に抛り込んだか、後ろに投げたか、その銀貨は何處かに在ると考へなければならぬ。その通りで一切の物事を考へる原則といふものは、無い物が突然に生ずるとか、在る物が不意に無くなるといふ事はないといこふを根抵に置いて、すべての思想は組立てられて行かなければならぬものである。

そこで人間の魂といふものも、これが果して有るといふのか、無いといふのか。魂が無いとするならば、人間が斯うしていろ〳〵の事を考へたりして居るのはどうするか、何にも無いものが考へて居るのだといふことは出來ない。魂をありとするならば、それは何にも無い所から出て來るものではない、さうして魂をありとするならばこれは決して無くならないといふ事になるから、そこに生命の永存といふことがチャント信ぜられる。眞理の一番大事な第一原則、第一命題といふものがそこにある、これが眞理の親玉ちや、眞理の親玉がチャント人間の生命の永存を保證するのである。枝葉の理窟で補つたりして揑ね廻すのではない、一切の眞理の根本原則が、人間の魂は明かに神が作つたものでもなく、偶然發生したものでもない、本來在りしものちやといふことを立證して居る、それを大我と謂ふのである。さういふ風なことを人間は何處かで考へるものである、大我といふのは佛教の言葉であるけれども、宗教學的に言へばこれを永存の觀念と謂ふ。宗教といふものは、人間が永く存在をして生き永らへて行く、

死んでも消えるものではないといふ、生命の實在永存觀念といふものがあつて、その永存を完うしたいといふ所に宗教は存するのである。同じ生き永らへるのに、泥溝の内の蛙になつて生き永らへてはつまらない、土の中の蚯蚓になつて生きてもつまらない、況んやそれ以下の餓鬼や地獄に墮ちては、永存しつゝも情けない事である、五年や七年なら辛抱も出來るけれども、千年萬年さういふ慘目な、且つ苦しい生活に墮ち込むことは厭な事だといふことがだん〳〵考へられて來る。生命の永存を確信せざる所には宗教は無いのである。それがグラついたら直ぐ信仰がグラつくのである、多くの佛教信者が今日信心するが如く、信心せざるが如き狀態に在るのは、この生命の永存を確信して居らぬからである。『まア信心をやめた譯でもないけれども何分店が忙しいので……天麩羅を賣らなければならぬので……』といふやうな輩が多い。併し本當に生命の永存が確信されたならば、天麩羅屋の親爺でも、うどん屋の女房でも、唯バタ〳〵やつて居るきりでは濟まない、モット落着いた信念が出て來る筈である。ところがさういふグラついた輩は、それなら人間は死んだら消えると思つて居るかといふと、さうでもない、女房が死んだ、それきり消えるならば心配は無ささうなものであるけれども、『どうも葬式を立派にしてやらなかつたから迷つて雪隱へ顔を出して來やしないか』……と言つて怖がつて居る、それはやはり死んでも魂はあると思つて居る。それなら生命は不滅と信じて居るかといふと、そこはどうもハツキリしないといふやうな譯で、實に變な心理狀態である、生きて居る間からモウ亡者みたいな人間が一パイ出來て居る。そこには本當の宗教は無い、唯だ狼狽があるのみである。本當の宗教が發生する時には、必ず自己の生命の永存を確信し來たるのである。

さうしてそれには唯だ生命の永らへるといふ事だ

けでなしに、その生命の内容を考へなければならぬ。さうするとその生命の内容には力があるのである、それが智慧となり、慈悲となり、いろ〳〵親切の心にも働き、物事を鑑別ける力にもなり、進んでそれを表はさうとするところの勇氣にもなりして、非常に生命の内容は尊きものである。人類の歴史に現はれて來て居る一切の仕事は、みな人の生命の表現である、それが大きな城も拵へれば、五重の塔も建てれば、書物も書けば、橋も造る、これ皆人間の心の力の表現である、さういふ偉大なる力をみな有つて居る。唯だ表面から考へれば、大工は大工の仕事だけしか出來ない、鐵を伸すことも知らなければ、字を書くことも出來ない、坊さんは字を書いたり本を讀んだりするけれども、橋を架けることは知らない……と思つて居るけれども、生命の内容を穿てばさういふ力も有つて居る、一人の力萬能である。大工にもなれば左官にもなれば、坊主にもなれば醫者にもなれば、政治家にもなれば軍人にもなれる、また泥棒にもなれば殺人犯にもなれる、何でもやればやれない事はない、一切の人間のやる事を一人して皆有つて居る。人間のやる事ばかりではない、馬の眞似でも狐の眞似でも鼠の眞似でも何でもやれる、非常な能力を有するものである、それがこの生命の内容に有つて居るところの力である。それを考へて見ると非常に面白い、今はその能力が鬱屈して居るから、字は書けるけれどもハンマーは持てないとか、ハンマーは振上げるけれども筆を持たせれば震へるとかいふやうな、見つともない人間になつて居るけれども、何でもやれるやうな偉大な力を表はし得るのである、故に學んで達せざる所はない。坊主でも途中からやめて勞働者になれる、亞米利加あたりでは隨分坊主をやめて勞働者になつた者がある、その方が月收が多いといふ、坊主をして居ると干からびた堅いパンしか食へないけれども、勞

働者になれば日に七弗も取れるから、美味い物を食つて晩には芝居へ行つて遊んで居られる、牧師などはつまらない、勞働者樣々だと言つて、坊主をやめて勞働者になつた者が澤山ある。それはやれるのである。だから人間の能力といふものは、人間だけで考へても實に多方面なもので、且つ偉大なものである、斯ういふ事を考へてこの永き生命と無限の能力をばこれを善用して行かなければならぬ。

これが反對にだん〳〵能力を縮小されて、蛆蟲の如くに唯コロリ〳〵と轉げる以外には何にも出來ない、マゴ〳〵して居ると雀が來て頭からコツンとやられてそれきりになる、今度また生れかはつて蛙になつたら、蛇にペロリと呑まれてしまつたといふやうな事を繰返しては、まことに情けない事ではないか。さういふ蛙か蛆蟲まで行かぬにしても、人間に生れても馬鹿に生れてさん〳〵人にこづき廻されて、その上に病身でマゴ〳〵して居るといふ事になつては、碌な嫁は貰へない、『これから先どうして食べるのでございますか』と問合されて『實は一人でも食ふに困るのだ』と言つたら、どんな鼻の低い女でも嫁に來者は無い譯である。それではつまらない、どうか同じ人間になるならば立派にやつて行く人間になりたいといふ欲望は、人間に必然起らざるを得ないのである。これが若し死んで一遍こつきりで消えてしまふものならば、太く短かくやつて首を吊つて死んでしまへば宜いといふことになる。よく情死などをして行く人間は、あれは人間一代で濟むと思つて居るのだらう、首吊つたその夫が蛙や蛇になるのだといふ事になると、サウむやみに首を吊つても樂にはならない。人間死んだら苦みの總勘定だと思つて居るのは愚な話である、人間が死んでどうして苦みの總勘定が附くか、寧ろ大抵の人間は、死ぬ時が大きな苦みの首途ちや。

さういふ風な人間の本質、本體を一つ明かにする

事に於て完全なる教を有つて居らなければ、善き宗教ではない。人間の皮相とその本體、今日の生命の無常である事と及びその本質の尊き事とを說くものが眞の宗教である。

モウ一つは人生の實相といふことを明かにするのである。今の人間の本體といふことは一人に就て言ふのだけれども、人の世の中といふものは自分一人ではない、そこに夫婦とか、親子とか、兄弟とか、親戚といふものがあり、複雜なる人生の社會生活といふものがある、その所謂世の中といふものがどういふものであらうか。これも表面から考へると、世の中は煩さいものだ、苦勞の多いものだといふことになつて、浮世は三分五厘ちやといふやうな安い値をつけた人もある、この頃では只でも構はぬといふやうな人も出來て居る。ところが人生の實相はなか〳〵さういふものではない、表面は誠に苦みの多い、嫌な事の多い人生であるけれども、自分の精神が一つ覺醒めて考へるとそこに偉大なる樂園を發見することが出來るのである。苦惱の牢獄かと思つたけれど、さうではない、そこに自由の天地がある、刑務所の内に抛り込まれて居つたのかと思へばさうではない、花園に花が咲いて鳥が囀つて居る、上野公園の精養軒のやうな所で御馳走を食べて居る、さうして代金は拂はないでも宜しいといふ風な、何とも言へない愉快な事になつて行く、そこに宗教といふものがある。だから宗教くらゐ有難いものはない、刑務所に抛り込まれたかと思ふやうな人生が、自由の花園になつて、只でいくらでも御馳走が食べられて、着物が欲しければ三越でも白木でも行つて好きな物を買ひなさい、錢は拂はぬでも宜しいといふやうな境界に置かれるのであるから、これが嬉ひだといふのはよほどの馬鹿に違ひない。宗教といふものは、この誠に厭ふべきやうに思はれる人生に、一つの信仰に到達したときには今言ふが如くに牢獄

は轉じて樂園にかはるといふ悅樂を與へるものである。宗教はさういふ事を教へて行くものである、それに教へ方の上手下手があり、完全不完全があるのであるが、何處かでさういふ意味を教へるものである。必ずや宗教といふものは、人生は苦しいものではない、苦惱は皮相であつて、そこに信仰を得たならば樂みがあり、牢獄が樂園にかはる、外部はどの位自分に不幸な境遇であつても、厭な有樣であつても、それが精神的には非常な幸福な樂園にかはるといふ偉大なる力を有つて居るのである。

モウ一つは人間には煩惱といふものがあり、そこに罪を作る、それは個人としても社會としてもさういふ風な煩惱惡業といふものゝ有樣に現はれて來るものである。ところが宗教の信仰に入ると、前に言ふとほり非常な樂園の生活が得られて來るのであるから、そこに煩惱が無くなり、平和の精神が滿ち溢ちて惡業が無くなり善を行ふといふことになつて、非常な平穩な善い事が出來る生活に變つて來るのである。

さういふ事を人生觀の上にハッキリ教へるので、即ち悲觀の人生觀が非常な大樂觀にかはるのである。享樂主義の小さな樂觀を否定し、又人生を唯だ苦惱の世界と思つて居るところの悲觀をも否定して、さうしてそこに皮相の悲みと樂みとを超越した大樂觀に達することを教へるのが、宗教の本質として最も大切な要素となるのであります。

（ロ）超人的靈格者の實在

それから第二には宇宙の超人的靈格者の實在を信ずるといふことが、また一つ宗教としては大事なことになつて來るのである。それは人間の宗教的要求といふものはこの宇宙を眺めて起るものである、これを宇宙的感情と宗教學には言ふのである。この廣大なる大宇宙を眺めて居るとそこに自然と或る神々しさを感じて來る、それは富士の山に登つて朝日の昇る所を見るとか、或は大きな海洋を見るとか、或は廣々とした蒼空を眺めるとか、或は春の野に出でてさうして鳥の囀り花の咲いて居る所を見るとかすると、自からこの大自然の靈力に對して感孚する精神を人間は持つのである、『あゝ大なる鼓、宇宙』といふ感じが起つて來る。始終俯向いてコツ〳〵と椽の下ばかり見て居るとそれが解らないけれども、のび〳〵した精神を以てこの廣い天地を眺めるとさういふ感じに打たれる。明治天皇の御製にも、

さしのぼる朝日のごとくさはやかに
もたまほしきは心なりけり

あさみどりすみわたりたる大空の
ひろきを己が心どもがな

と仰せられたるが如く、晴空一碧、澄みわたりたる大空を眺めると、そこに人間といふものは非常な清い精神が湧くのである。

その精神がモウ一つ進むと、この大宇宙には何者か非常な尊ぶべき者があるといふことが考へられる。初めは唯だ蒼い天だ、廣いものだナといふだけで、『天とは何ぞや』と問はれても『それは解りませぬ』と言ひ居るけれども、自然とそれが『お天道さま』といふことになつて來る、お天道さまと言ふ時分には、そこに天に心があり、人格があるといふことを認めるやうになる、即ち或は神といひ、或は佛といふが如き、正義と仁愛に滿ちたる偉大なる人格を認めることになつて、その方を有難く念ふ、その方は吾等を護り、この天地の間に幸福あれかしと御はたらき下さる方であるといふ風に、神樣、佛樣の尊さを考へて來るのである。どうしても宗教はさういふ大人格者を客觀的に認めるものである、唯だ主觀的に、佛は自分の心の内に在るとか、唯心の彌陀、己心の淨土といふやうな、そんな理窟だけ言つて居つても滿足は出來ない、どうしても頭を低げて一心合掌して『有難い』といふ對象が無ければなら

ないのである。それを禪宗坊主みたいに、『佛とは我なり、本堂に祀つてあるあんなものは木像だ』と言つて、自分が佛壇に登つて佛樣を蹴倒して、『サア俺を拜め』と言つてフンゾリ返つたりして居る、又さういふ者を見て『あの和尚は覺つて居る、偉い』といふやうな事を言ふのは、皆これ宗教としては不具者である。或は又自分の眞價を知らないで、唯だ『人間は罪のかたまりぢや』と言つて蹴落されて、吃驚して罪人が逃げ出すやうな風に說くところの信仰もある。慢心して社會主義者のやうな工合に、自分が一切の者を殴り倒して取つて代るのだといふやうな、狂暴な事をやるのをエライ宗教だと思つて居る者もある。併ながら決して唯だ悲觀して首を吊つて死んで行くやうな者が健全なる國民にあらず、また國王を排斥して自分が威張りちらすといふ左傾思想が健全なる國民でもないが如くに、佛教の內に於ても唯だペタ〳〵頭を下げる者ばかりがエライ信者でもなければ、或る宗旨の坊主のやうに威張りちらして、『釋迦何者ぞ』といふやうなことを言ふ者が偉いこともない。

それは宗教の本質を明かにせざるが故に、起る間違である。これを國民的に考へて見たらスグわかる、國民自身にも確乎とした大和魂があり、發憤すれば人間一人の力といふものは偉大なものである、決して空しく徒死すべきものではないといふ向上努力の強い力を認め、而して上には皇室を戴いて、皇室の無限の聖德、稜威に對しては感孚感激するといふことでなくてならぬ。恰も楠木正成の如く、自分が全力を發揮すれば八百の部下を以て百萬の北條軍を擊破る力を持ちながら、後醍醐天皇に對し奉つては絕對の尊敬を捧げて居るといふ、あれが眞の日本國民の本領である。その通りに宗教に於ても、例へば日蓮聖人の如く、自分の力を表はしてはあの通りに縱橫無盡の活動を成し遂げてあらゆる力を發揮し、而して本佛に對しては絕對の信賴を捧げる、そこに本當の宗教があるのである。それが解らぬやうな者は、楠木正成が偉いのやら石川五右衛門が偉いのやら解らぬやうな暗愚者と謂はなければならぬ。宗教といふものは、自己の力を十分に奮ひ起して、さうして宇宙の絕對者の力と結合する、そこに眞の宗教があるといふことは、これは天下の公論である。ナニも一人一個の學者の唱へる議論ではない、人類の今日有つて居る文化の示すところの大きな相場が、『斯の如きものが良き宗教である』といふことを明瞭に證明して居る譯ナンである。

（八）兩者の感應

さういふ風に考へて行くときに、その自分の魂の價値と、宇宙の靈格者、神佛の尊嚴とを念うて、それが結びつくのである、自分の心の奧底に在る淨き尊きものが眼を覺まして、さうしてこの偉大なる宇宙の靈格者と精神的交通を開く、それが兩者の感應といふことである。『感』は自分の感激する心、『應』は神、佛の方からそれに應同して守護を垂れ、救濟を與へ給ふことを謂ふのである。その感應の狀態は實に不思議にして何ども言ふことが出來ない、恰度天の月が池に映るが如きものである、水が月を伴れて來たのか、お月樣が池の中にやつて來たのか、水は昇り昇らずして月を迎へ、月は降り降らずして影を宿す、月は依然として天に在り、而も水は月を浮べて穩かに輝いて居る、それと同じ狀態のものがこの兩者の感應である。佛は我が心に通じ、我が心は佛を迎へる、その關係は不思議にして說明は容易に出來ぬけれども、我が信仰のそこに佛と我が精神とは一つになる、即ち神人合一し、生佛結合して居る狀態に現はれて居るものが宗教である。それが實に何とも言ひやうのない有難い事である、斯うなる。お月樣が池の水に映つて居るやうな狀態であるから、これを不思議の感應といふのである。それを考

へないものであるから佛樣を聾のやうに思つて『私はこんなに賴み居るのでございますが聞えますか』ガラン〳〵……とやつて居る、丁度聾の親爺の晝寢をして居る所にでも行つたやうに、『賴みますぜ〳〵』と言つて、お賽錢をして貰つたり、鐘をガン〳〵鳴して、少しでも自分の願をよけいに聞いて貰はうとする。そんな事をしないでもチャント佛樣は感應して下さるのである、丁度今日は無線電信とかラヂオといふものが發明されて居る、それに依れば小さな郎屋の内で話をしても、その機械さへ精巧であれば東京の話が倫敦にも聞える譯である、先般は若槻さんが倫敦で演說をせられた、それが日本で聞えたといふ譯である。その時には又別の機械で蓄音機に吹込んであつた、若し差支があつてラヂオの放送局に行かれなければ、蓄音機で代理させるつもりであつたと若槻さんの手紙に書いてある。今日は機械でさへもさういふ事が出來る、況んや佛樣の御力はモット〳〵偉いものである。そこでその佛樣の敎がお經となつて今日に傳はつて居るのは、これは蓄音機に吹込んだやうなもので、この中から如來の梵音といふものが放送される譯である。その放送されたる法華經を拜讀するとき、『その人は釋迦牟尼佛を見たてまつるなり、佛の御口よりこの經典を聞くが如し』といふことになるのは、丁度蓄音機に吹込んだ若槻さんの聲がラヂオで日本に聞えて來るやうなものである。人間の力でさへも、倫敦と日本のこの遠い距離を隔てゝ聞える位のものであるから、況んや如來秘密神通の力といふやうな絕對の力を持つ佛樣や神樣といふものと、吾々の純眞なる信仰の精神の感應結合といふものは、それは實に自由自在なものであるといふことは疑ない。布團の中に寢て居らうが、電車の内に乘つて居らうが、そんな場所の如何や、距離の遠近を問ふものではない、自分の心さへその方に差向ければ直に感應は來る、そこに實に有難い事があるのである。人間も病氣になつていよ〳〵といふ時には、モウ身を動かすことも出來ない、人に想へようと思つても聲が出なくなつてしまふ。さういふ時でも自分の心の内に一心に感應を信じて御祈禱をすれば、その一つの心は神佛に通じて偉大なる力を現はして行くといふことになる、そこに宗敎は活躍するのである。

（二）精神生活の法悅

その感應を信じたときに、一種の靈力を發現し來るものである、さうしてそれが人間の精神生活といふものゝ上に加はつて來るのである。精神生活といふのは、心の悅びに依つて世の中を活きて行くのである。人間の世の中に於ける幸福といふものは、本當は心の悅びである、チョット考へると、毎日美味い物を食つたら幸福だとか、良い女房を貰つたら幸福だとかいふけれども、その良い女房といふのでも結局は心の問題である、標緻がいゝとか、御馳走を上手に拵へて呉れるから良いとかいふ風に考へて居るけれども、その女房の料簡が自分を嫌つて居る、『斯ういふ風にするのは眼の前だけぢや、肚では俺を毛嫌のやうに思つて居る、』腐敗をすれば毒を飲まされるかも知れない』といふことになれば、いくら美しい女房を貰つても決して嬉しいものではない。やはり『斯ういふ風に御馳走を食はして呉れるのも俺を大事にするからだ』といふやうに、その女房のやさしい心から出たと思へばこそ、家庭の生活にも妙味があるけれども『本當は俺を嫌つて居るのだ、親切にするのも油斷をさして毒を飲ませようとするのだ』といふことになれば、本當の悅びといふものは無い。であるから兩人の心さへ本當に一致するならば、やはり昔から言ふ通り、破鍋をさげて暮しても、そこに幸福があるといふ事が出て來るに違ひない。これは夫婦の生活でも親子の生活でもその通りである。

又たゞ夫婦親子ばかりではない、社會生活の全部がやはり同じ事ナンである。人間がこの人生に活きるといふことも、心に滿されて活きるならば、たとひ不味い物を食つてもそれで幸福を感するといふ事が出て來るのである。と言つてナニも無理に不味い物ばかり食つて居れといふ譯ではない、幸福な境遇に置かれゝば美味い物も食ふが宜いけれども、左樣に注文どほりにいつも美味い物を食つて……といふ事のみに行かぬ場合が人生には出て來る。人生五十年、これを一年に譬へて見ると、春と夏と秋と冬とあるやうなものである、春や秋のやうな氣候の良い時もあれば、夏のやうな暑さに苦しむ時もあり、冬のやうな寒さに惱まされる時もあるといふ譯で、どうしても一年の間には春秋のやうな氣候の良い時と、また冬のやうな寒い時とを經なければならぬ。人間の一生といふものもやはりそれと同じで、どういふ人々でも皆やはり得意の時代と不遇の時代といふものがある、五十年の一生を通じて初めから終まで春の四月の花見のやうな調子で行くといふものではない。若しさういふ風に行かうと思つたら、人間は忽ち死んで行くといふ悲哀に直面するのである。夜も晝も御馳走を食つたり酒を飲んだりダンスをやつたりして居るやうな人間は、忽ち酒に中てられるとか、腦溢血を發したとかいふやうなことで死んでしまふやうな事になる、或は又死なないまでもそれが爲に人からは信用を失ひ、自分がそんな事をし居る爲に女房が情夫を拵へて家出をしたといふやうなことになつて、なか〳〵サウ五十年七十年の間、夜も晝も酒を飲んでコツヤ〳〵とやつて居る譯に行くものではない、必ずやそこに非常な失意の時代、不遇の時代といふものに直面するのである。

であるから人間の生涯を貫いての眞の幸福を保證しようと思へば、どうしても根本を精神に置かなければならぬ。人は精神に活きさへしたならば、寒い

冬が來ても暑い夏が來てもこれを樂しむやうに考へることが出來る、冬は寒いと初めに覺悟して少しよけいに着物を着るなり、又皮膚を平生から鍛錬して置くなりしたならば、冬が來てもナニも慨くことはない。それと同じやうに少々貧乏になつても、それは世の中は景氣の好い時代もあり不景氣の時代もあるのだから、不景氣になつたら、冬が來たら綿入の着物を着るやうにチヤント箱筥に入れて置くやうに、平生からそのつもりで貯金をして置くといふことになれば、不景氣が來ても驚くことはない。それを何時も温かい時ばかりのやうに思つて、單衣か袷の着物一枚で、綿入も布團も賣飛して酒を飲んでしまつてブラ〳〵して居るから、サア冬になつたと言つても綿入を買ふ錢も無いといふことになる、それは本人の不心得の爲である。必ずやその人の精神が確乎して續いてさへ行けば、人生といふものは如何なる境遇に置かれても悅びを失はないやうにやれるものである。それはよほど極端な所まで行けるものである、例へば日蓮聖人の如きは、頸斬られる所まで行つても法悅を失はないのであるから、死んでも尙ほ且つ悅びを保ち得るといふことになれば、これ位强い事はないのである。宗教は最後の息を引取る所まで行つて頸を締められても悅びを失はぬといふ所までの力を教へて居る、だから實に宗教の精神生活といふものは絕對的のものである。他のものではどうしてもサウは行かぬ、どの位淨瑠璃が好きだからといつても『貴樣淨瑠璃をやめなければ頸を斬つてしまふぞ』といふことになつたら『アヽやめます〳〵』と言ふだらう。宗教の信仰は『貴樣その信仰を捨てなければ殺すぞ』と言はれても『この信仰を捨てゝ生きるよりは寧ろこの信仰と共に死することを悅ぶ』といふ決心に立ち得ることは、宗教に於いて所謂捨身決定といふことですべて教へられて居る事である。そこまで行き得る價値といふものは實に

偉いことである。それは何もむやみにそんな頭を斬られるやうな事をやらないでも宜いけれども、頭を斬られても悦びを失はない者が、蒟蒻しか食へないからと言つて泣いたりする筈はない、命が無くなつても悲むことはないといふのだから、蒟蒻でも澤庵でも飯の食へる間は結構だといふことになる。即ちこの精神的生活に於ける悦びといふことは、人生各般の境界に處して決して苦みを感じないといふ力になるのである。

それが所謂法悦の力といふものである、これを除つては人間は決して幸福といふものは無い。たとひ百萬の富を重ねても、精神的の力を除いたならばその人の生活は暗澹たるものである。いくら金はあつても金に依つて左右する事の出來ないものがある、大事な息子が病氣になつたとか、可愛いゝ女房が死んだとか、或は娘が非常な美人であつたけれども、自動車が顚覆つて眉間に疵が出來てモウ嫁に行かれない、それをクヨ〳〵してヒステリーになつて夜も晝も泣き喚いて居る、『あの娘さへなければ俺も苦勞はないが、家へ歸ると娘の泣き聲が耳に入るので實にたまらぬ』といふやうな、いろ〳〵の出來事があつてなか〳〵人生といふものは唯だ幸福のみを以て行くものではない。精神生活に活きざるの徒は、何れの日か非常なる悲歎に悶えるものである。昔からの人を見ても皆さうである、小野小町のやうな美人でも、終ひには落魄れてその末路は悲慘なものであつた、それが宗教に入ればどうか斯うか救はれるのである。和泉式部さか紫式部といふやうな、昔から名高い才媛でも、唯だ文章を上手に書いたとか、學問がよく出來たといふだけでは、眞の幸福は感じ得られなかつたのである。或は吉原の廓で何々太夫といふやうな名を謳はれた女もある、彼が全盛を極めて、褥襦のきれいなのを二枚も三枚も重ねて振舞うて居る時には眞の幸福はない、彼がこの人生を一つ

看破つて宗教に來つて、お經の一卷も讀まうといふ心持になつたとき、眞の精神の安定を得るのである。彼等がその末路、容色も衰へてしまつて、隅田川の土堤に大福餅を賣るやうになりましたと言つて頬かぶりして居つても、その女の精神に寧ろ安定がある。何人でも宗教に來れば眞の安定が得られるのである。

今日の新聞の論說に出て居つたが、この頃女が亭主や子供を殺すといふやうな事件が非常に多い、最近三日の間に四組もさういふ事があつた、みな子供を二人ぐらゐ殺し、亭主を殺して、自分も自殺をはかつたりして居る。それにはいろ〳〵の原因があらう、けれども必ずしもこれは貧しい爲ではない、みな相當な生活をして居つたけれども、ヒステリーになつたりした結果、さういふ兇行を演ずるに至つた、これは非常な惡い事であるが、その原因の最も根本的なるものは、宗教信仰を有たぬ所に在るといふことを、その新聞記者が書いて居る。『たゞ神經を刺戟するやうな享樂の生活のみ嬉になつて、宗教や信仰は塵芥の如くに捨てられ、面もこれに代るべき何等の精神的慰安を持たない社會は、遂に斯の如き悲慘事を產み出すものである』と言つて、宗教の信仰を塵芥の如く捨てゝしまひ、精神の慰安を求めざる結果であるといふことを論じて居るが、これは此の新聞記者が確に適切な事を言うて居ると思ふ。これはナニも亭主や子供を殺す人ばかりではない、そこまで行かないでも、始終頭痛がするとか、肩が凝るとかいふやうな事を言つて居る女の人は、みなこの仲間である、それが嵩じて來れば遂にそこまで行く可能性がある。まさか亭主まで殺すといふやうな事は、よほどの事でなければやらないだらうが、よく泣いたり喚いたりする人間は今日は一パイ出來て居るのである。

この法悦の力といふものゝ尊いことを理解しない

國民は無智である。新聞に今頃そんな事を書いて貰つて初めて知るべきものではない。人は肉體には物質的の食物を要する、パンなり飯なり食はんければ死んでしまふと同じことで、精神の糧としては宗教の信仰なかるべからざるものである。人間飯を食はなければ死ぬといふ事を知つて居るならば、心に宗教の信仰を與へなければ完全なる生活が出來ぬといふことを、一緒に併せて領解すれば宜いのである。飯を食はずじやが薯も食はなければ人間は死ぬといふ事を知らぬ者は一人もあるまい、それと同じやうに、精神の生命は宗教の信念に來らなければ滿足は得られないのである。どんな大金持でも、宗教の信仰を有たざる者の最期は悲慘なものである、彼の岩崎彌太郎がいよ〳〵死に際の事が新聞に出て居つたが、モウ刻々と臨終は近づいて來る、すると『うどんが食ひたい』と言ひ出した、併し彼の病氣は顎の所が腐つて齒が動かない、そこでうどんを一寸ほどの長さに切つて五六本皿に載せて汁をかけてやつたけれども、その一寸の長さのうどんの切端一つを食ふことが出來ない、食ひたい〳〵と言ふけれども痛くて口が開けない、とう〳〵一寸のうどんを咽喉に入れること能はずして、岩崎の親爺は遂に怨を呑んで死んだのである。どんなに貧乏して居つてもうどんの一杯ぐらゐ食へるだらう、そんな死に方をするなら骨は折れない。政治家の方では彼の桂太郎公爵なども、日露戰爭の戰捷に醉うた時分には得意の絶頂に達して、『太閤秀吉何かあらん』といふやうな事を言つて、秀吉よりも自分の方が偉いやうな事を言うて居つたが、彼が死にかけた時分には少し不遇の時代になつて來て、非常に人生を欺いて死んで居るのである。それところではない、秦の始皇は六國を滅して遂に皇帝の位に即き、萬里の長城を築いて非常な威勢を示したけれども、彼は蓬萊瀛洲に不老不死の藥を求めて遂にそれを得ずして、海岸でのたれ死をした。彼は非常な英雄豪傑であつたけれども、宗教を有たない爲に、不死の藥を求めるなどといふまやかし者の言を信じて、旅先でまごついて死んだのである。ナポレオンは世界の大英雄だといふけれども、彼がセント・ヘレナの孤島で死ぬ時分には、やはり如何に英雄などと言つても宗教を有たなければ最後は悲慘なものである、五大洲を卷蔔する英雄の事業よりは、一人の人の心を救ふ宗教の感化は更に光あるものだといふやうな事を言つて死んだのである、初めて宗教の價値を知つて彼は吃驚した譯である。諸君でもさうである、諸君もいろ〳〵銀行の通帳や株券などを勘定し居るけれども、いよ〳〵臨終が迫つて來ると、通帳や株券などよりは宗教の信仰の方が大事だ、株券はモウそつちへやつて、御本尊の前に蠟燭を上げて呉れ」といふことになる、いよ〳〵といふ時になつて「御本尊などは除つてしまつて株券をそこに並べて呉れ、番號を讀んで呉れ」といふ者は無い。實に人間といふものはそこに於て宗教が最後の力である、法悅の精神的威力といふものゝ偉大なことがわかるのである。

宗教はその偉大なものを與へるのである、その事を宗教が人を救ふとか、人をたすけるといふ言葉で言ひ表はして居る。近頃は宗教が直ちに物質生產の事に關係して、貧乏人に飯を食はすとか、パンを與へるとか、おやが薯を配るとか、とにかく坊主が鉢卷でもして飛び出さなければ時代後れの坊主だなどと言つて居る人があるけれども、坊主が鉢卷をして襷をかけて握飯を拵へたり、薯をふかしたりするやうになつては、その文明は危いものである。さういふ事をする人足は幾らも居る、薯をふかしたり、握飯を拵へたりするには、掌の皮の厚い奴の方が宜いのである、『冷めてからでなければ握れませぬ』といふやうな奴に握飯を握らしてもうまくは行かぬ。だからモッと能くいろ〳〵の事を理解しなければなら

ぬ、宗教の本質、本領といふものはそんなものではない。今日は唯だ「政治とか經濟とか勞働とかいふやうな事が價値があるのだ、人の心を善くする教といふやうなそんなものは要らぬものだ」と言つて居る者が多い、實に日本人はその點に於ては暗愚な者だ。斯ういふ精神教化の會合の爲に人を集めようと思へば、だん〳〵骨が折れるやうになる、この骨の折れるだけそれだけ日本は益々衰りつゝあるのである、まだ〳〵日本人は眞に救はれては居らない。これが詰らぬ話ならば幾らでも寄つて來る、家賃不拂同盟だとか、或は徴兵忌避の運動だとかいふやうな事を看板にすれば、ナンボでも寄つて來てワイ〳〵言ふ、「正しい道を正しく行かうぢやないか」といふ運動に對しては、「そんな事は駄目だ」といふ、これは實に慨かはしい事である。だから私はこの統一圏が一人の聽衆しか無くなるまで行つても、この教化といふものゝ重んずべき事を絶叫するのである、人が來るから必要があるといふのではない、來なくなれば倍々必要がある。その代りまたこれが一たび人心が覺醒て、正しい法を聞かうといふことになつて來かけたら、來ないで宜いといつても一パイ押かけて來るやうになる。それは丁度蝟みたやうなものである、その點を考へれば誠に憐れなものだ。

いづれにしても宗教といふものはさういふ點に於て人に精神生活の法悦を與へて行くのが本質である。さうして宗教は賢きも愚かも、上も下も、押なべて普遍的に精神生活を與へるものである、金持だけを喜ばすものでもなく、貧乏人だけを悦ばすものでもない、そこに貧富とか賢不肖とかいふやうな階級的區別を見ない。如何なる境遇の者でも同じくこれを導く、即ち天の雨が一樣に降つて大きな木も小さな草も潤す、一雨三草を潤ほすが如く、佛教は普遍的に一切の者に法悦を與へるものである。

（ホ）道義的感情

さうするとその法悦の力は道義的感情といふものに現はれる。道義的感情といふのは、人間が何事か有難いと思へば、どうぞして善い事をしたいといふ心持になる。その善い事をするといふのは、一方から言へば惡い事をして居つたのを止めようといふことである、即ち罪を悔改める事になる。今までは例へば大酒を飲んで女房の頭を殴つたりし居つたけれども、信心をするやうになつて朝夕勤行でもすると、どうも酒に醉ばらつて女房の頭を殴るといふやうな事では調子が揃はない、これはどうしても掌を合せてお經を讀む以上は、女房の頭を殴ることはやめなければならぬ、殴るのをやめるには、酒を減すなり廢めるなりしないと、醉ふと又ツイ手の方が早くなるといふやうな譯だから、この自分の惡い癖を矯さうといふ事を考へるやうになつて來る。一方には善い事をしようと考へて來るから、罪を改めて善を行ふといふことが起つて來る、それが宗教の効果の上に於ては大切な事柄である。唯だ信心をして本人一人だけ悦んでボンヤリして居るきりでは、少とも面白くない、その悦んだ内から惡い事をやめて善い事をして呉れるといふことで、そこに利益が擧つて來る譯である。唯だ本人を悦ばすきりなら、それは資本の注ぎ放しである、それが左樣に罪を改め、善を行つて呉れるから、そこで息子が信心をするやうになれば親が喜び、女房がよろこび、國家がよろこぶといふ延いて近所隣家がよろこび、子供が悦び、ことになつて、その信心の潤ひが周圍に及んで行くのである。

そこでその普遍的の教化といふものが左樣に起つて來るといふと、それが社會の如何なる職務に從事して居る人にも悦びの心、善を行ふの力として現はれて來る。どのやうな仕事をやつて居る人でも職業は問はない、政治家であらうが、軍人であらうが、勞働者であらうが、さういふことは問はない。宗教

の信仰を持ちさへしたならば、必ずその職業の中に光ある成績を擧げて來る、軍人としては模範的の軍人が出來る、職人としては模範的の職人が出來る、正直でもあり、能く働く、仕事も上手である、「あれに委せて置けば家を建てるにも決して不正な利益を貪らない、無駄はしない、あの棟梁に頼みさへすれば安心して建築を託することが出來る」といふ職人が出來て來る、宗教の信仰が眞面目であつたならば、あらゆる職業が非常に光輝を發するやうになつて來る。隨つてそれに依つて人類の文化全體が理想的に發達するのである。

坊さんが善い事をしないといふやうな事を言ふ人もあるけれども、それは信心を本當にして居ない坊さんである、宗教も職業となると割合に信心をしなくなる。醫者の不養生といつて、「ナーニ酒などは幾ら飲んだつて關はない、ヤレ〳〵、後で苦味丁幾でも飲んで置けば宜い」といふやうな事をやる、それと同じである、坊さんが不信心だからといつて、その眞似をしてはいけない。人はとかく慣れゝばそこに力を喪ふものである、何でもさういふものである、物が澤山あるとそれを粗末にするといふのが、人間の淘に淺ましい弱點である。だから夏密柑の澤山出來て居る所に行けば、夏蜜柑などは田圃の内に捨てゝある、さづま芋などでも澤山作つて居る所に行くと、取りたい放題である、「自分の手で持てるだけ、小さい半巾に包めるだけ位なら只で持つて行きなさい」と言つて居る、そんな所ではさつま芋などは何とも思つて居ない。坊さんも丁度毎日々々同じやうな事をやつて居るから馴れてしまふ、菓子屋に奉公をした小僧が、初めの間は菓子を摘み食をして仕方がない、けれども默つて放つて置くと終ひにはモウ鼻について、食へと言つても食へぬやうになる。だから坊さんは菓子屋の小僧みたやうに、菓子を食へと言つても食へぬやうになつて居る、そんな者を先生にして宗教の信仰を學んではいけない。併し同じ宗教家の中にも本當の信仰を失はない者、今の鼻につくといふやうなものでなく、モウ少し理想を持ち、目的を持つて居る者は、永久にその信念といふものは亡びない、そこは能く考へなければならぬ。坊さんが腐つて居るから宗教に價値が無いやうに判斷して居る人が澤山ある、「坊主憎けりや袈裟まで憎い」といふ諺があるが、坊主を見て宗教の價値を判斷するといふことは、醫者の不養生を見て衛生の不必要を考へて居るやうなもので、そんな事は論ずるに足らない。そんなものを切離してさうして宗教が人文に如何なる關係を有つかといふことを考へなければならぬ。

（へ）人類文化の一大要素

さうすると宗教といふものは人間の本性に根ざして、堅實なる基礎の上に立つて人類文化の建設の最も大切なる要素を成して居るものである。何故かといへば政治、產業、學問、軍事、刑罰、さういふものは孰れも文化の構成の上に大事なものに違ひないけれども、併しモウ一つそれより進んで大事なものは宗教である。何となれば前に言ふが如くに、宗教の精神生活といふものを與へなかつたならば、政治、產業、學問、軍事といふやうなことが理想的には發達をしない、政治も腐敗をするとか、產業の内にも不正が行はれるといふことになつて、丁度今日新聞を賑はして居るやうな事態を現出するのである。政治界に於てはいろ〳〵の不正があるから、綱紀肅正といふことが叫ばれる、產業の上にもいろ〳〵の私曲があるから、產業の不振、財界の不安も起つて來るのである。そこで宗教の教化が先に入れば、その政治家、その實業家がみな善くなる譯である。坊主を考へるとつまらぬやうに思ふけれども、そんな者は取つて除けて、純潔なる理想的なる宗教を、政治家なり、實業家なり、學者なり、軍人なり、司法官

なり、それ〳〵社會の重要なる活動をする者にこれを與へれば、社會は秩序整然として發達を遂げるものである。殊に民衆一般の如きも、深き學問は無くとも宗教の信仰に來り得るのであるから、この多數の民衆をして、宗教に依つて精神を整へ、精神を慰め、精神を善くせしむるといふことが、これが社會を教化して行く上の根本方針である。

今日の時弊を考へても、先づ精神生活を侮どつて、さうして物質的の享樂にのみ活きんとするからそこに錢が要る、それは人間の幸福といへば酒を飲む事とか、御馳走を食ふ事とか、活動寫眞を見る事とかいふやうな事ばかりに考へて居るから、錢が無かつたらどうする事も出來ない。彼等は墓口が空つぽになつたならば、それと同時に青菜に塩を振つたやうなものである、自分の下宿なり寄宿舍なりで墓口をあけて見る、僅かばかりでもあるといふことになれば、「サア、これで活動寫眞を見に行かう……」「カフェーへ行かう……」「うどんを食ひに行かう……」といふ事になるから、墓口に錢があれば非常に元氣づいて活躍する、墓口が空つぽであつたならばハーンと意氣消沈してしまつて、「頭を縊らうか、それとも泥棒しようか……」といふ氣になる、實に危ないものである。さういふ風に墓口が空つぽになると同時に、頭を縊らうか、泥棒にならうかと考へるやうな奴が一パイ居る世の中が、到底うまく行く譯がない。けれども宗教を與へなければどうしても人間はサウ考へる、これを救ふ方法は無いのである。錢を皆んなの墓口にいつも入れて置いてやるといふ譯にはいかない、底なしみたやうにナンボでもバッ〳〵と使つてしまふのだから迚も追つかない。金持の所から持つて來て貧乏人の墓口に入れてやつたら宜いおやないかと言ふけれども、そんな事をすれば日本銀行も大藏省もスグ空つぽになつてしまふ。消費者が滿足するやうな、この癖惰な多數民衆が滿足する

やうな社會政策を行つたら、その國家はスグ破産してしまふ。此の頃も失業問題がやかましくなつて、この失業者をどうするかといつてワイ〳〵やつて居るけれども、この失業者が滿足するやうになつた時は、即ち國家が亡びてしまふ時である。失業者といふものはナンボでも出て來る、またその失業といふ事がある爲に、そこに職業の競爭もあれば、勞銀の問題も起つて來るのである。これが皆んな失業して居つても安全に食へるといふ事になつたら、馬鹿々々しいから働きもしなければ腕も磨かない、あつちへ行つては失業者でございと言つて食はして貰ひ、こつちへ行つては失業したと言つて金を貰つて來る、さうなつたら産業の發達なんといふ事は夢にも望むことは出來ない。であるから失業問題といつても、自然の狀勢がそこに來るといふものは、これはよほど考へなければならぬ、なか〳〵面倒な問題である。

それには先づ根本に於てどうしても人々を精神的に自覺せしめなければならぬ、救ふ方も精神的でなければいけない、救はれる方にも宗教が無かつたならば決してうまくは行かない。現に或る國などでは、食ふに困る連中が人の家へ行つて御馳走を食はして貰ひながら、終ひには皿を皆打破つて行くといふ風な狀態になつて居る。教會などへ五六十人の勞働者が押かけて來て、「コラ坊主、飯を食はせろ、食はせなければ窓硝子を打破るぞ」と言ふ、そこで牧師は仕方がないから「まア演說する間だけ騷がないで呉れ、これが濟んだら皆に晩飯を差上げるから……」「ヨシ、そんなら早くやれ」といふ譯で、殆んど脅迫されて御馳走を出す、御馳走といつてもサウ大した物は勿論出さない、先づ一人前二十錢か三十錢、ライスカレーに何か一皿といふやうな程度のものを出す。さうすると皆默つて食ふだけ食つて置いて、「コラ坊主、貴樣はふだんこんな不味い物は食つて

居るまい、此ライスカレーはボロ〳〵ぢやないか、よくもこんな物を食はして我々を侮辱したな、覺えて居れ」と言つて、イキナリ皿をみんな叩きつけて割つてしまつて、ドヤ〳〵と引上げてしまふといふやうな事が流行つて居るといふ。人間は教へなければさういふ事になる、他人の家で只で御馳走を食つて、歸りがけに皿を打破つて行く、それでも平然として彼等は決して改める樣子はない。遂に國王までが慘殺して古井戸の内に抛り込んで尙ほ懲らずといふことになるのである。坊主などは無論の事、眞先にみな泥溝の内に抛り込めといふことになつてしまふのである。

左樣に宗教家を呪ひ、國家を咀ひ、社會を呪つてそんな亂暴をやつたからといつても、その後は決して幸福にはならぬ、皆乞食のやうな生活に陷つてしまふのである。現に今の露西亞はどうであるか、この頃永田秀次郎氏が露西亞から歸つて來て言うて居る、浦潮から汽車に乘つて停車場々々に着いて見ると、その前に現はれて來るものは、恰も乞食の群のやうだけれども乞食とは言へない、乞食といふものは一方に普通の人間があつて、それより汚ないから乞食といふ名が附くのだけれども、悉くの人間がさういふ風で皆屋外に寢て居る、雨の降るなかにヅブ濡になつて居る、それが大勢であるといふことになると乞食とは名けられない、臭い民衆とでも言ふべきものである、日本人には鼻向けがならぬと書いて居る。モスコーへ行つて見たら、殆んど珠數つなぎになる程澤山、停車場の前にさういふ臭い民衆が居るといふことである。嘉納治五郎氏も歸つて來てさう言うて居る、又陸軍の露國の事に精通して居る人もその事をハッキリ證明して居る、決して嘘ではない、行つて見なくとも分つて居る。だから左樣に國家を覆かへすやうな事をやつて、貧乏人が寄つてたかつて國家をまるきり食ひ潰しても、忽ち皆所謂

臭い民衆になつてしまふだけで、決して幸福などは來るものではない。

その多數人の食ひ潰すといふ事の猛烈なことは、チョット考へて見たらわかる。人間が働かずに横着な奴が食ひ潰すとなつたならば、物資は忽ち無くなつてしまふ、あの東京の九月一日の震災の時にも、火事もあつたからではあるが、何れにしてもスグ其の日モウ食ふ物が無くなつてしまつた、それは二日、三日と飯を食つたのは上等の方で、皆火事に逐はれてワーッと逃げ出した人間は何も食ふことが出來ない。幸に海軍省の無線電信があつてスグ軍艦の方へ命令をして、清水港あたりから米を積んで芝浦へ持つて來た、それが四日の午後、初めて米が東京に入つたので皆助かつた、早速到る處に貼紙をして、「米は軍艦でドン〳〵運んで居る、ナンボでも賣つてやる」といふ事をパッと報らせた爲に、人心が漸く安定したのである。大勢の人間が一遍に食つてしまふと何でも無くなる、私はあの時に平塚に居つて、それから歩いて歸つて來た、四日の日に藤澤といふ所を通つたけれども、あの邊は家は澤山殘つて居る、流れた家もあるけれども燒けては居ない、併し米は一粒も無い、さうして通行者には飯は食はさぬと書いてある、此土地に居る者が漸く握飯を一日に二つ宛一人に與へるだけしか無いから、旅行者には一椀の飯も振舞ふべからず、代金を取つて賣るべからずと書いてある、食ふ物は何にも無い。だん〳〵歩いて一度横濱の少し先まで來る間に、何にも賣つて居ない、唯だ芋をふかして居る所が一所だけあつた、腹が空つて居るから食つたけれども、筋だらけのひどい芋だ、皮の所だけ筋があるかと思つたら内までスッカリ筋ぢや、エライ芋をふかし居つた。それだけで、それから品川まで來る間何にも無い、大森の驛を下りたところに天麩羅屋が天ぷらを揚げて居るのを見て吃驚した、あの邊は地震といつても實

に輕かつた。横濱から向ふへ行つたならば、そんな食物などは何にもありませぬ、だからグラ〳〵ッと來たならば忽ち何でも無くなつてしまふ。私は平塚の海岸に居つたが、グラ〳〵ッと來た、スグこれは變だナと思つたから戸外へ飛び出して野宿と腹をきめた、その晩方になつて、食糧が無くなりはせぬかと思つたから米を買ひにやつた、するとモウ白米は無くなつて玄米しか無い。忽ち小豆のしなびたのも無くなつてしまふ。八百屋の店へ行つても皆持つて行つてしまふといふ譯である。この東京市民が一日に食つて居る米でも味噌でも澤庵でも菜葉でも、外から輸送しないで食つたとなれば、忽ち空つぽになつてしまふ。それは實に恐ろしい事である、社會は組織立つた機關に依つて、交通運輸の機關、販賣取引の機關、それ〳〵の秩序が立つて居る事に依つて、初めて吾々の生存といふものは完了して居るのである。それを何の考もなく組織を破壞して、パッと無秩序にやつたならば、それは實に慘なものになつてしまふのである。

宗教は左樣な意味に於て社會組織のあらゆる方面の機關に對して精神の糧を與へて、人類文化の極めて大事な要素を成して居るもので、これは頗る明瞭な事であると思ふのであります。

上來述ぶる如く、宗教の本質とは、人間の本體と人生の實相とを明かにし、宇宙には超人的靈格者の實在を信じ、その兩者の感應に依り、精神的生活の法悅を得、そこに道義的感情を養うて過を改め善を行はしめ、此の教化を以て人類文化の一大要素を成すものであります。斯樣に宗教の本質といふものは、人間一人の本體から說明をして、最後人類の文化を完成して行く上にまで役立つことを、理解しなければならぬのであります。この原則に照して試に多くの宗教を點檢して見れば、その宗教の優劣、價値如何といふことは直ぐわかるのであります。先づ

第一に人間の本體を說くといふことに就て、實に組織な思想の宗教が多いのである、假に基督教を見てもスグわかる、基督教は佛教に次いでの高等なる宗教と謂はれて居るが、彼は人間の本體をどう說いて居るか。即ち人間は神に依つて造られたといふ事を言ふのである、初めに神は世界を造つて、それから赤土を捏ねてアダムを造り、アダムが晝寢をして居るどてつ腹を抉つてイヴを造つたといふ。神が造つたといふのならば、神は己れに似せてといふのだから、モウ少し工合よく造つたら宜からうと思ふけれども、それが蛇にだまされた、だまされぬやうに何故造らなかつたのであるか。さうして花園の木の實を食つたが故に原罪といふものがある、洗うても〳〵なか〳〵その罪は落ちない、遂にさういふ罪の人間があまり澤山溜つたから、ノアの洪水を起して大方殺してしまつたといふ、いろ〳〵神樣もお手數のかゝる事だと思ふ。神樣のする事がサウいろ〳〵やり損ふやうでは、免職ではないか。決して徒に基督教の惡口を言ふ譯ではないけれども、人間の本質本體を說くといふ事に就ても粗末なものである。斯樣に他の宗教を一々比較研究して見たならば、佛教のみが實に立派な教であるといふことがわかる。

又宇宙の絕對靈格者を認めるに就ても、その他あらゆる點に於て、いま申したやうな事柄は佛教が最も整頓して居るのである。佛教は實に宗教の本質よりして、その模範を成すものである。西洋の宗教學者の議論を聞いたり、他の宗教を取寄せて來たりする必要はない、佛教こそ宗教の手本である。佛教に依つて宗教學といふものを構成し、宗教は斯くあるべきものだといふことは佛教に依つて教はれば宜いのである。宗教といふ方が廣いやうに考へる人もあるかも知らんけれども、さうではない、佛教に依つて考へなければ眞の宗教は解るものではない。佛教が宗教を導き、宗教を批判する、佛教に依つて認め

られた宗教ならば良き宗教であると謂つても宜い位のものであるけれども、それでは話の立て方が我身勝手のやうに聞えるから、姑く「宗教の本質より見たる佛教」といふのであを、本當は「佛教の本質より見たる宗教」で宜しいのである。佛教の方が完全であるから、すべての宗教、すべての學者を集めても佛教には及ばない、無論お釈迦様には及ばないのである。唯だ話の順序として姑く斯ういふ風に説明をして來たのであるけれども、落着いて考へれば拿を合せて佛教に禮拜を捧げるより外ない。その佛教の完備卓越せる點の詳細な話は、次回にこれを述べることにするが、その佛教の中に於ても法華經、その中に於ても日蓮聖人の教は最も正しく佛教の眞價を傳へた結構な教であります、お互にその正しき教を得たことを悦んで、倍々信仰をはげみ、その信仰の中から來る法悦の味ひを失はぬやうに、歡喜の内に生きて、さうして悦びの力は遂に道を改めて善を行ひ、國家社會、人文發達の上に貢獻をして行かうといふ決心をするのが、眞の佛教徒の責任であります、その意味に於てお互に努力致したいと思ふのであうです。（次續）

若し人の譏るを聞きては心に忍べよ
若し讃むるを聞きては心に愧ぢよ
道を行ひて自ら慢るなかれ
人の離るゝを見ては和合せしめよ
人の善を揚げて咎を隱せよ
人の恥づることは説くことなかれ
父母師長を供養すると雖も此が爲に
惡事をなさゞれ。

優婆塞戒經

お斷り

天風三萬里紀行は紙面の都合に依り休載

記事

○知法思國會第二回街頭布教誌（完結）

第六日

五月十七日（曇天）夜七時半開會　會場　日本橋濱町公園

昨年の例により下田嘉右衛門氏宅を集合場に顧ひ午後七時同家に集合、松岡林造氏引率のもとに同勢四十餘名行列堂々と數流の會旗を押立てゝ會場を中心に周圍の町々を示威宣傳、七時半公園廣場に開會、山口智光師先陣をうけたまはり、次で山田義一氏、鈴木秀學氏、田中道爾氏、中村清一氏綿引弘氏、織原克巳氏、磯部滿事氏等起つて國民教化の大本を力説終つて梶木顯正師閉會を宣し陛下の萬歳を發聲一同唱和、十時五分過ぎ全く會を閉じた。當夜下田家にては御主人始め一家を擧げて茶よ菓子よと一同へ接待下さつた事は何んとも感謝の言葉がない位有難かつた。（當夜聽衆四百餘名）「教」施本百部。

○第二隊を編成、明治座前から人形町寄りの方面に進軍開會、松岡林造氏開會、山口智光師、日暮光道師、磯部滿事氏、相續で立ち「今に及びて時弊を革めずむば或は前緒を失墜せんことを恐る」の聖旨を奉體し日蓮聖人の示す國體觀念に立脚して法華經的正義の信仰に目醒めよ、と旗鼓堂々白熱的叫びに民衆の良心に訴ふる處があつた。當夜の應援者次の如し。

高見澤夫妻、福島健次郎氏、寺奥政市氏、藤田格治氏、亀井利一氏、川原きん子姉、ホノルゝのお客光永初代姉、岸野藤右衛門氏、安住武都造氏、奈藤良太郎氏、川奈鉉作氏、吉田よしを姉、丸川氏老母及累德婦人會員多數、高橋與市氏久保田氏、土屋貞太郎氏、石崎榮宏氏、毛見春吉氏、長谷川福太郎氏、和田皆吉氏、一本木悦太郎氏、金指亀吉氏、阪本泰造氏、淺邊清吉氏、岩上清三郎氏、石毛はる姉、小日向鐵太郎氏、和賀謙助氏、宮下きく子姉、報恩閣の耕一君、五島一雄君、日暮光道君、山口隆一君、同父君、統一閣の村田顯明君等であつた倘馬淺練明師がテーブル腰掛臺等種々御貸し下さつたので大助りであつた。

第七日

同　十八日（晴天）夜七時半開會　會場　本郷新花公園

統一閣の第三日曜講演が終ると、本部からは村田顯明、松岡林造の兩氏が先發、濱町の下田家より前夜の道具を運ぶ、午後七時集合場の本郷區春木町伊東竹三郎氏宅に勢揃ひ高橋辰二氏先頭にメガホン隊の宣傳よろしく示威行進町内一巡會場へと乗り込んだ、旗、太鼓、提灯の堂々たる吾等の行進は

四隣を壓して勇しく、夜陰に響く堂々たる男性的の太鼓の音、如何にも一種の聖戰を想はしめる、會場に着するや會歌合唱、一本木悅太郎氏登壇開會を宣し、續いて磯部滿事氏次に川原謹子女史赤誠を披瀝さるれば聽衆拍手を贈る、次に阪本泰造氏次で日本大學生坂田勇造君熱辯を振ひ終つて小西日喜師獨特の快辯に聽衆を引つけ時正に十時を過ぐる五分よく說きよく聽いた。最後に山口智光師閉會を宣し、終りに寺澤萬三氏萬歲發聲一同唱和、梶木師が一同を調へて伊東家に引上げた時は十時半であつた。(當日聽衆三百餘名)敎施本百部

當夜伊東家では夜業を休み吾等をお迎へ下さつた休息所入口には幕を張り提灯をつけてお迎へ下さる眞情、會するもの皆各々床しい感謝に胸を打たれた、散會に望み茶菓甘酒の御供養を頂いた、夜遲くまで御主人始め店の方々が何くれとなく御世話下さつた事は何んとも感謝の言葉がない位であつた、當夜の應援者次の如し、龜松壽准松氏、竹內太八郎氏、高矢體敎師、本田健二氏、岸野藤右衛門氏、川奈銀作氏、吉田よしを姉、入山銑藏氏、綿引弘氏、織原克己氏、山田義一氏、杉山光衛氏、同かよ姉、土屋貞太郎氏、中村藤吉氏、安住武都造氏、石崎榮宏氏、尾野宮一氏、岩澤理八氏、金指龜吉氏、西山吉五郎氏、高見澤親子、三宅たけ子姉、若林よね子代理、松本操子姉、中村清一氏御兄弟等であつた。

第八日

同　十九日(雨)夜七時半開會　會場　府下小松川立正會館

午後の四時頃から雨がボツ〳〵降りだした、同志の人々はさぞ雨を恨んだ事であらう、然し本部では若し雨が降れば「會館でやる」、と覺悟してゐたのでさのみ落膽はしない、午後五時四十七分降りしきる中を本部を出發、立正會館では小西上人、高矢上人が元氣よくお迎へ下さつた、同志の磯部滿事氏東洋大學生日暮光道君が先着して居られた。直ちに雨の中をメガホン隊は宣傳に出發、中にも小西上人の令孃弘子さんが青年男子の中に伍して「今晚只今より立正會館に於て國民敎化の大講演會が御座います、御早くお出下さい」と澄み渡る大聲に町內を觸歩かれたのには一同涙ぐましく心の底から感激させられた。子を見る親に如かずだ。

會館では七時半法要、八時講演會開會、小西上人の挨拶に次で梶木顯正師本會運動の精神を披露、次に川原中將夫人謹子女史熱心に現下の國狀を說いて國家を安泰に置かんとするには、民心を安定せよそれには舊敎にもある如く修身齋家から始めなければならない、修身齋家の本は信仰を本とするに如かず、と力說され、續いて松岡林造氏東洋大學生日暮光道君次に磯部滿事氏「生活と信仰」と題して國民の自覺を促し、次で田中道爾氏立つて經濟生活の根底は精神なる事を說破し、最後に館主小西日喜師の閉會の辭を以つて會を閉じたのは十時を過ぐる四十分であつた。

終つて小西夫人の心を込めた「お壽し」の御供養を頂いて各々嬉々として家路にとついた、雨は盛んに降つてゐる、當夜の應援者は次の如し、安江久子姉、伊藤わか子姉、島本あさ子姉、和賀淺助氏、小澤元重氏、外小松川町會館幹部の方々であつた。

第九日

同　十九日(晴)夜七時半開會　會場　本所錦糸公園

當夜の集合所なる篠崎インク工場に、熱血護法に燃ゆる同志三々伍々相集まり來つて、法戰出動の準備全く整ひたるは正に午後七時を過ぐる十分、覓義章師大太鼓を打ちて御題目勇ましき音頭裡に錦糸町大通りを「知法思國」旗を夜風になびかせつゝ會場錦糸公園に大行進、幸なる哉、此の夜天氣晴朗にしてまばゆきばかりの星座は燦然として我等の上に在り。

會場たる公園入口に至つて一同玄題唱和に續いて大太鼓の伴奏に「知法思國」歌合唱し梶木顯正師登壇大聖人御遺文を拜讀して熱血溢るゝ開會を宣するや、既に求道の聽衆は我等の周圍に充滿、次に山口智光師立つて「日本人は日本人としての自主的精神無かる可からず」と力說、代つて川原中將夫人謹子女史登壇、日本婦人としての優にやさしくも强き情操に訴へて「信仰を有する女性は皆美し」と結び、和賀淺介氏立ちて三敎の歸結としての法華經の敎の偉大さを讃えて親切を極め、次に覓義章師登壇、「人生と云ふ大きなグランドのバツター、ボワクスに立つ我々選手は」と師一流の熱と言葉と態度を以て東洋思想獨特のものに對する深き考へ方、愛し方を述べ大聖人と四條金吾に於ける「殿の罪若し深くして地獄に墮ちなば日蓮も共に」を熱讀して人生に於ける深くも美しき愛を絕叫して降壇全身汗瀧の如し、代つて田中道爾氏登壇「一樹の蔭一河の流れ」と冒頭して經濟戰線に立つ國民の態度を熱叫、代つて爆彈和尙小西日喜師登壇、長期の講演旅行に聲疲れたりと雖も護法の熱辯當る可からず、「如來と共に飢ゆる光榮に泣け」「人生に於ける一切の勞作は如來に迄進展する光榮を有せざる可からず」と師獨自の言葉に依り信の絕對境を絕叫、身動き一つせざる多數大衆の心魂に聖なる爆彈を投じ、次に磯部滿事氏穩やかなる言葉の中に熱を含みて本運動の聖なる主旨を述べて閉會を宣し陛下萬歲三唱、施本敎百部

例に依り別動隊第二會場は市電龜戶行公園前停留所側に即是道場して大獅子吼、先づ梶木顯正師立ちて「三敎の特色と法華經の心髓」を述べ「人敎無からざる可からず」と力說して開會を宣すれば、松岡林造氏登壇して「偉大なる佛敎を侮蔑せんか、社會急亂れて國危し」と熱叫、代つて山田義一氏立ちて此の未曾有の經濟國難に直面して國民生活の上に一大覺醒無かる可からず」と親切を極めて長講、次に高矢體敎師立ちて鬼子母の說話を引きて佛陀の慈念の如何に深きか

を示し生死の問題を掲げて佛教の大安心を熱說し、次に覓義章師登壇「人生意氣に感ず」と歸んで一切の人間が苦しみ惱みつゝも深き佛陀の愛に懲えて人と人とが固く抱き合ふ實際の生活線上にこそ佛陀は顯現すると高調して全身是れ熱、終りて梶木顯正師本會の主旨を述べ陛下聖壽萬歲を三唱して閉會を宣したるは正に十時二十五分、尙高矢體教師、覓義章師病後熱誓の餘り、講演中共に前後して壇上より落下、終りて顏見合して「同病相哀れむ」と破顏一笑、けだし幸なる哉、斯くて公園入口に於ける第一隊と合して隊伍を調へ玄題旗なびかせつゝ御題目の行進裡に篠崎インク工場に引きあげしは正に十一時なり。茶よ、イナリ壽しよと、篠崎氏方の心からのもてなしに一同感謝、工場內に祭れる大本尊に向ひて一同聖戰勝利の法業を捧ぐ、尙當夜の應援者左の如し。

村田顯明師、從野澄勇師、日暮光道師、寺奧政市氏、藤田格治氏、小澤元重氏外四名、本田健二氏、龜井利一氏、岸野藤右衞門氏、高橋與市氏、平田氏、土屋貞太郎氏、中村藤吉氏、岡野あきの姉、石崎榮宏氏、後藤仲子氏、山田三五郎氏淺邊清吉氏、高見澤氏親子三名、下妻氏令妹、報恩閣栗德婦人會員一黨、長山慶應氏、五島一雄君、山口龍之助君、報恩閣耕一君、小西師夫人令孃等。

第十日

同　廿一日(晴)夜七時半開會　場所　青山明治神宮參道入口　安田銀行前

今回計劃の最後の夜である、本部を出發したのは午後五時半、集合場赤阪區青山南町六ノ一四七吉田珍雄氏宅、七時を打つ頃には同志の人々は三三五五各所から集つて來た、吉田家御供養の茶菓等を心から感謝しつゝ時至れりと同家前に勢揃ひ、南町より明治神宮參道入口へと一路隊伍を組んで出發、堂々たる行進の勇しい太鼓の響春の夜風にヒラヒラ飜へる數流の旗、道行く男女戶每の人達何事のあるやと驚を見はる、メガホン隊の宣傳に會場を知れば忽ち街頭道場は人波が押し寄せて來る、例に依り會歌合唱玄題合掌裡に覓義章師登壇開會を宣し「生活戰場に須らくストラツクアワトするなかれ」と高調力說するや聽衆拍手を以て之れに應へ、次に梶木顯正師國難打開の道は「國民お互ひが人格的に信念的に目覺むるにあり」と叫ぶ、次で高矢體教師、松岡林造氏、磯部滿事氏、厚木秀子女史、山口智光師、和賀義見師等交々起つて國民の進路を指示し最後に小西日喜師登壇師獨特の論法を以て人生生活の根本目的を明し迷信を打破し綴說橫說、聽衆の中から「辯士うまいぞ……」と云ふ者あり、主客共に熱して來た、聽衆はヒシ〳〵と詰めよせて來る。彈丸は火花をチラして飛ぶは飛ぶ。

○第二隊は青山師範校前に陣取り磯部滿事氏開會次で一本木悅太郎氏、鈴木秀學師、綿引弘氏、覓義章師、梶木顯正師等第二回聖義の最終日を此處をモンドと戰つた、聽衆も又能く聽いた。時正に十時十分過ぎ、梶木師發聲陛下の萬歲三唱第二會場を閉じて本隊に戻れば、小西文學士奮戰力闘の眞只中、宣傳隊の打つ太鼓の音は力强く闇の彼方に響いてゐる。十時三十分漸く當夜の講演會を打切る旨を宣し小西師自ら東京市內外に亘る日蓮主義運動道場を紹介萬歲發聲一同唱和、會の機關紙「敎一」數百部を施本して集合場に引上げた。當夜吉田家ではそばの御馳走に茶よ菓子よと種々御供養下さつた。一同明晩の閉會式を語りつゝ家路についたのは十一時であつた。當夜の聽衆合して約五百餘、その應援者次の如し。

高見澤氏夫妻、土屋貞太郎氏、岡野あきの姉、安江久子姉石崎榮宏氏、土屋けん子姉、中田とき子姉、本田健二氏、川原蓬子姉、齋藤良太郎氏、釋眞誓師、中山昌治氏、織原克己氏、長山慶應氏、小野とし子姉、山田英二氏、中島壽惠子姉、毛見春吉氏、山田三五郎氏、金指龜吉氏、伊藤わか子姉若林よね子姉、吉田珍雄氏夫妻、宮下きく子姉、丸川老母、小西師夫人、三宅たけ子姉、相馬氏夫人、下妻氏未亡人及令妹、村田顯明君、五島一雄君、報恩閣耕一君、隆之助君、山口師父君、鈴木破魔司氏、他報恩閣栗德婦人會員多數等であつた。

結文

第十一日

同　廿二日(晴)　統一閣

五月十二日聖祖大聖人伊豆伊東御法難の聖日に火蓋を切つて同廿一日まで十日間、上野公園の畫を入れて都合十一回の街頭布敎は天候に惠まれたからでもあつたが、極めて良好の成蹟で無事に終了する事を得たのは自他共に同慶に堪えない、殊に吾等の運動に共鳴して新に街頭に立つ一團が擡頭した事を見ても略察知出來やうか、そこで廿二日午後六時半から本部に於て滿行報答感謝會を開催する事とした、定刻に至れば梶木顯正師導師となり感謝法要、次で懇談會に移り、梶木師の挨拶に次で柴田一能氏感想談を述べられ、續いて和賀義見師立つて所感を披瀝された、其の內に紀念撮影を爲すべく中山昌治氏來閣、依つて感想を中止し記念撮影に移る、終つて豫て準備をして置いた「梅園」の「しるこ」に一同舌鼓を打ちながら再び感想談に花を咲かせる、山口智光師、加藤重太郎氏、松岡林造氏、福島健次郎氏、織原克己氏、長山慶慶氏、覓義章氏、毛見春吉氏、中山昌治氏、本田健二氏、梶木師、高矢體教師等盛んにテーブルスピーチに花咲かせつ時の過ぐるを知らず、見れば正に十時を過ぐる廿分漸く梶木師閉會を宣した。當夜は市川立正會の定例集會と重復せる爲に、小西上人は顏を見せられたにもかゝわらず記念撮影にも入つて頂く事が出來なかつた事は遺憾とする所で、和賀師、田中道爾氏も同會へ行かれ、又磯部氏も急用あつて辭され數談を交へられなかつた事は返すん〳〵殘念であつた。

猶又當夜の記念撮影に際して川原謹子姉並にホノルゝの光永姉がお見へなかつた事を甚だ惜しく思つた。そして講師の中に日蓮宗の宗務院から只の一人も顔出しなかつた事を寔に淋しく感ぜられた。

開堂供養

東京府下瀧野川、日蓮主義本佛教會

佛教の布教家が時代思潮に押し流されて經濟を第一義とする傾向が、しかも日蓮教徒の中にも彩られて來た、一例を擧れば其露骨な記事が先頃一青年宗教誌上に公開されたのを見て深の滲む悲哀を感じた。

宗教が時代に擯ずられ俗惡に迎合するやうでは最早其生命は滅びたもので社會は匡救されない、國家としては亡國の運命におかれたものではあるまいか、佛教はそんな淺薄なものか、法華經はそんなに價値なきものであろうか、後五百歲中廣宣流布の金文も空頼みか。

日蓮教學の其體と其用を混同し誤る衆の散在せる中に毅然として身はしかも道の爲めに遂に盲人の列に加へられねばならぬ運命の持主とはなつても其護法の至誠は益々として上がる盲目上人の名こそ適所に有名である、則ち和賀義見師其人である。

義見師は教員生活中に發憤することあつて出京し、野日種大僧正に由り得度され、爾來街頭宣傳を生命とせられた。孤獨無援の和賀師は唯捨身弘法あるのみと三百六十五日全市の内外に亘つて路傍の血叫びに漸く感銘する純信者が加はり、かの大震火災前後は最も苦境に沈淪しつゝ、しかも遂に一會堂の建立を見た。寔に赤誠の力程強いものはない、「一滴あつまりて大海となる微塵つもりて須彌山となれり」と仰せられてゐる。宗勢が振はぬとか人は宗教に耳を傾けぬとかいふが、それは其人の熱誠の足りない證明であるまいか。求むる人は澤山ある、けれ共しつくりと來ぬから信じない迄の話である。日蓮聖人のお心持を充分に將へずに自己流の加味した雜念が何樹筆に際し過ぐる十日間に亘つてのそれ〴〵集合場をお引受け下すつた各家に深く感謝いたし、又其の間種々御供養下さつた皆様に厚くお禮を申上げます。合掌　（梶木報）

として憐める人を救ふの權威があろうか、求むる人の心に滿されぬは寧ろ當然であろう。

鬼神も泣かするものは世の中の　人の心の誠なりけり。

とき遅きたがひはあれど貫かぬ　ことなきものは誠なりけり。

肉眼は失つても心眼は愈明新となる義見師の涙ぐましい活動の具體化せる淨舍が數年ならざるに早くも狹隘を來すやうになつたので不況時代にも不拘先頃工を新にし豫定通り竣工したから去る五月二十八日午後三時より大僧正本多猊下大導師の下に今成、小西師等十數名の僧員と三百の來集に依て型の如く盛大な開堂供養の式典が擧行された。

開式後七時からは紀念講演會に移り、護法篤信の數名が誠意を披瀝された後、佐藤維太郎閣下並に本多猊下の無疲辯に一同感激極りなく堂内來聽者三百五十名の外、更に門外に多數溢れるを見受け其の五十展轉の功德こそ頼もしくも亦會員諸氏の責任の大であることを感じた。時已に十時を過ぐ茲に目出度散會された。（滿生）

千葉縣東海村善龍寺震災復興

善龍寺は大正大震災の爲堂宇倒潰の憂き目に際會せるも少緣寡檀の寺院にて復興至難の感ありしに同寺檀信徒及び黑須師の熱誠なる努力に依り金貳千圓を投じ二十四坪の堂庫裡寺再建され去三月廿日落成を機にして宗祖大聖人六百五十遠忌慶修併て開堂供養を營み武田僧正慶讃文、東海村長祝詞あり。

伊藤師、御園師、出口師、山津師の應援甚敢なる法修大衆一同法雨に浴したり。

因に開寺檀頭酒巻熊藏氏の悲母ふさ子女史は開堂落慶式を讃し祠堂金五十圓也即納ありたるを感謝す。（黑澤報）

教報

○東京統一團本部教戰錄

△六月一日（第一日曜）晴、午後一時半開會、初めに法要、次で日蓮主義講演會開催、本多日生猊下の「實際生活と佛教」と題する御講演があつた、來會者八十有餘名。

△同三日（晴）、午前十時より上野公園忍坂上に於て道路布教、大園庄太郎、梶木顯正、松岡林造、磯部滿事氏等大熱辯を振ふ、聽衆約六十餘名。

△同八日（第二日曜）午後一時半開會、知法思國會國民教養講座、理事長本多猊下の挨拶に次で境野黃洋氏の「聖德太子と三寶の興立」と題する講演があつた。

△同十三日（晴）、午前十時より上野忍坂上に於て道路布教、梶木顯正、和賀義見、松岡林造、大園庄太郎氏等の屋外教化講演會があつた。聽衆四十餘名。

△同　日（晴）、午後一時半より地明會例會、初めに法要次で講話「如何にして救はるべきか」と題して會長本多猊下のお話があつた。來會者一同大喜悅を感じた。當日大菩きぬ子氏より來會者へ菓子を供養の爲寄贈され、三宅たけ子氏は會へ茶呑茶椀二百個を寄附された、來會者百餘名。

△同十五日（晴）、第三日曜午後一時半開會、初めに法要次に講演「諸種の問題と佛教」の題下に本多日生猊下の御講演があつた、來會者百餘名有餘名。

△同廿二日（晴）、第四日曜午後一時半開會、知法思國會國民教養講座、磯部滿事氏の開會の辭に次で今泉定介氏の「建國史の大要」と題する講演があつた。（梶木報）

○正法寺便り（牛込區早稲田南町）

△例會毎月第二日曜日午後七時）

六月八日例會、聽衆九十餘名、講題及講師、

總本山妙滿寺參詣感想談　大園庄太郎氏
同　坂本　米吉氏
同　山岸　熊吉氏
同　早川　太吉氏
決定信に就て　僧正　木村　日保師

○豫告七月例會十三日第二日曜日午後七時

講題及講師　會場正法寺

お盆の話　僧正　木村至誠氏

現世と來世　本村日保師

名古屋布教誌

五月五日　會館にて開目抄講義　原田日勇師

五月八日　會館にて琴人會　清水一乘師

五時八教の事　原田日勇師

同向文に就て

五月十五日　會館にて
　開目抄講義　　　　　　　原田日勇師　　　　國民情神
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　本多日生猊下
五月廿四日　會館にて大講演會
　道德の容知より見たる佛教　本多日生猊下
五月廿五日　東洋紡績講話
　國民道德の中軸　　本多日生猊下
五月廿六日　專賣局講話

化」本多猊下　同夜大紙俱樂部にて「佛教と道德」本多猊下。二十二日堂閣寺にて談話會大泉、水也田、中川諸氏の所感演説あり。二十六日堂閣寺にて講話會講演武田氏の「開會の辭」に次で「生活の二傾向」大泉師「宗旨の三秘」京藤師。

大阪教報

五月十二日堂閣寺にて「迷より悟へ」京藤師「人生の二大考察」中川僧正。十四日上田宅にて「強く正しく生きよ」京藤師。二十日蓮成寺にて婦人會「開會の辭」中川師「阿含の教

誌料領收　自五月二十一日 至六月二十日

一金四拾圓也　名古屋　清水一乘殿
一金六圓也　札幌　本澤隆正殿
一金貳圓貳拾錢也　函館　橋浦治次殿
一金貳圓貳拾錢也　同　廣田竹吉殿
一金貳圓貳拾錢也　萩　若人社萩支部殿
一金五拾錢也　横濱　岩澤理八殿
一金壹圓也　青森　柏木吾市殿
一金壹圓貳拾錢也　函館　岡村誠之助殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　大川六雄殿
一金貳圓貳拾錢也　濱松　彥坂寅吉殿
一金貳圓也　東京府　大久保龍殿
一金壹圓也　大阪　橋詰良正殿
一金參圓也　川崎　廣瀨調殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　稻葉榮之輔殿
一金貳圓貳拾錢也　同　川奈錠作殿
一金參圓也　同　高橋辰二殿
一金拾圓也　横濱　吉田三郎兵衛殿
一金貳圓貳拾錢也　千葉縣　時友太助殿
一金貳圓貳拾錢也　神戸　辻俊泰殿
一金四圓六拾錢也　東京　竹內文治殿
一金五圓也　京都　細野辰雄殿
一金壹圓四拾錢也　大阪　武田萬次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　紀伊　乾凉甫殿
一金貳圓貳拾錢也　岡山　杜岳龍華殿
一金貳圓貳拾錢也　仙臺　佐藤みつ殿
一金貳圓貳拾錢也　四日市　水谷市太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　高岡　島山友次郎殿
一金二圓二拾錢也　熊本　村上辰彥殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　和井田寬舟殿
一金壹圓貳拾錢也　同　岡片しづ殿
一金貳圓貳拾錢也　同　澤田萬吉穗殿
一金壹圓貳拾錢也　同　遠藤寳爾殿
一金貳圓貳拾錢也　兵庫縣　笹井つた殿
一金貳圓貳拾錢也　岡山　磯島晶浩殿
一金貳圓七拾錢也　島根縣　加納廣淳殿
一金貳圓貳拾錢也　福井縣　宮川順學殿
一金貳圓貳拾錢也　長崎　永見京浩殿
一金貳圓四拾錢也　釜山　池田金作殿
一金九圓也　神戸　熊井本光殿
一金貳圓貳拾錢也　東京府　柴岡喜一郎殿
一金貳圓貳拾錢也　大連　重松弘湧殿
一金壹圓二拾錢也　函館　武田鋼殿
一金二圓二拾錢也　大阪　熱田定夫殿
一金五圓也　東京　若林よれ殿
一金二圓二拾錢也　愛知縣　服部平之助殿
一金二圓二拾錢也　同　山本金太殿
一金九圓五拾錢也　東京府　本佛敎命殿
一金拾七圓也　大阪　友廣忠正殿
一金四圓四拾錢也　大阪府　渡邊トヨ殿
一金二圓二拾錢也　京都府　野村智秀殿
一金參圓也　濱松　松本松一郎殿
一金二圓四拾錢也　千葉縣　平山三藏殿
一金二拾八圓也　廣島　紀野俊耀殿
一金拾圓也　千葉　森川賢松殿
一金四圓四拾錢也　長崎　永見京浩殿
一金二圓二拾錢也　中津　有田日淨殿
一金參圓也　東京府　佐久間元三郎殿
一金二圓二拾錢也　同　渡邊薪邦殿
一金二圓二拾錢也　千葉　伊東梅四郎殿
一金二圓二拾錢也　福島　伊藤トシ殿

右難有入帳仕候也

「統一」會計

會計子より内内皆樣に御相談申上ます。

本誌御購讀は一切前金の筈でありましたが、近頃御多忙の爲めか若干誌料の御停滯せる向も見受けますので、多分お忘れの事と存じまして甚だ不本意ではありますが便宜上帶封に［未收自何年何月］又は［乞送金］の捺印を以て御注意致すかも知れません、けれ共其等の煩雜な手數をばお省き下さるやうどうか折角法國の爲めに本誌の活動をして益御援助の思召で宜しく御配慮御願申上ます。

目次

宗教の本質より見たる佛教（中卷）……本多日生
天風三萬里紀行（其十二）……小林日種
止暇斷眠……
記事……
○在佛の野口上人
○各地教報
○誌料領收

第三十五年八月號

國民教養講座案内

去三月より開催せる本講座も愈本月を以て終了に付此際奮つて御來聽を切望仕候

一日時　七月十三日及二十七日　自後一時半至四時

一會場　統一閣　淺草區北清島町十四　電車通

一科目講師

一儒教と我國の文化　文學博士　服部宇之吉氏（十三日）

一佛教の本質と其價値　大僧正　本多日生氏（廿七日）

一講聽料　一科金貳拾錢　但教員、軍人、警察官は無料

昭和五年七月　知法思國會本部

統一定價

一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

前金之事

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾圓	前金之事
一頁	金拾五圓	
半頁	金九圓	
四分一頁	金五圓	

昭和五年六月廿四日印刷納本
昭和五年七月一日發行（第四百二十四號）

神奈川縣横濱市磯子區磯子町廣地一四八
編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
印刷所　都印刷所　電話高輪六〇二四番

不許複製

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所　振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ